

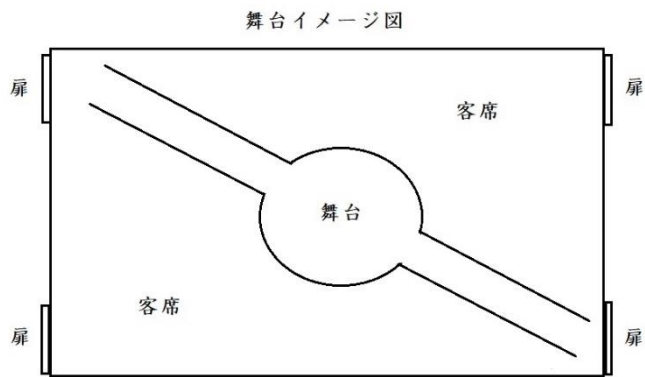
破
戒

破戒 原作 島崎藤村
 戯曲 黒岩力也

登場人物

瀬川丑松《せがわうしまつ》……………飯山の小学校に奉職する青年教師。
 土屋銀之助《つちやぎんのすけ》……………丑松の親友である青年教師。
 風間敬之進《かざまけいのしん》……………士族出身の老教師。お志保の父。
 お志保《おしほ》……………敬之助の娘。貧苦の為に蓮華寺に預けられている。
 猪子蓮太郎《いのこれんたろう》……………思想家。丑松が敬愛する人物。
 蓮華寺の住職《れんげじのじゅうしよく》……………蓮華寺住職。女狂いの性癖の持ち主。
 猪子の妻《いのこのつま》……………猪子蓮太郎の妻。
 奥様《おくさま》……………蓮華寺の住職夫人。住職の女狂いに悩む。
 島崎藤村《しまざきとうそん》……………長編小説「破戒」の作者。

四幕					三幕					二幕					一幕					出番表	
五場	四場	三場	二場	一場	五場	四場	三場	二場	一場	五場	四場	三場	二場	一場	五場	四場	三場	二場	一場		
○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			○	瀬川
○	○	○	○	○				○	○		○			○			○			○	土屋
			○		○		○					○		○	○				○	○	風間
○		○	○	○		○		○			○	○		○			○				お志保
				○			○		○				○		○		○				蓮太郎
			○		○		○	○						○							住職
○	○	○		○		○				○	○	○		○			○		○		猪子の妻
○				○	○			○	○		○		○			○	○				奥様
○	○			○				○		○	○		○			○		○	○		藤村



※サントミュージゼ・大スタジオを想定

四幕					三幕					二幕					一幕				
五場	四場	三場	二場	一場	五場	四場	三場	二場	一場	五場	四場	三場	二場	一場	五場	四場	三場	二場	一場
.....
.....
.....
8	8	7	7	6	6	6	5	5	4	4	3	2	2	1	1	1	9	6	3
4	1	8	4	7	4	0	7	1	3	0	1	7	3	8	5	3			

目次

一幕一場

藤村が来る。

島崎藤村 これは過去の物語である。過去には後の時代にとって、反省すべき事柄も多い。過去こそ、真実であるからであろう。どうも島崎藤村です。私の事ご存じない人もいると思いますので、軽く自己紹介したいと思います。私は1872年明治5年に信州木曾。現在の岐阜県中津川市馬籠に産まれました。亡くなったのは1943年昭和18年8月22日です。えっと。作家としての活動はロマン主義詩人として「若菜集」などを出版して、更に小説に転じ「破戒」「春」などで代表的な自然主義作家になりました。作品は他に、日本自然主義文学の到達点とされる「家」、姪との近親相姦を告白した「新生」、父をモデルとした歴史小説の大作「夜明け前」などがあります。本当に色々、書いたんですけど、とりあえず今から始まるのは「破戒」です。じゃあ、始めたいと思います。天長節の夜は宿直の当番であったので、丑松と銀之助の二人は学校に残った。

銀之助が来る。

島崎藤村 敬之進は急に心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

敬之進が来る。

島崎藤村 夕飯の後、まだ宿直室で話しこんで居るうちに、壁の上の時計は八時打ち、九時打った。それは翌朝の霜の烈しさを思わせるような晩で、めっきり寒かった。丑松が見廻りに出て行った後、まだ敬之進は火鉢に齧り付いて居た。やがて二十分ばかり経って丑松は帰って来た。

瀬川丑松 いや、もう屋外《そと》は寒い寒くないのツて、手も何もかじかんでしまう。

土屋銀之助 顔色が悪いねえ、君は、どうかしやしないか。

風間敬之進 我輩も今、それを言おうかと思つて居たところさ。

島崎藤村 丑松は話そうか、躊躇する。二人が熱心に自分の顔を見守るので、

瀬川丑松 実はねえ、不思議なことがあるんだ。

土屋銀之助 不思議なとは？

瀬川丑松 校舎の外を一廻りして、運動場の木馬のところまで行くと、誰か僕を

呼ぶような声でした。はてな、聞いたような声だと思つて、考えて見ると、そのはずさ、僕の阿爺《おやぢ》の声なんだから。

土屋銀之助 へえ、妙なことが有れば有るものだ。

風間敬之進 それで、何ですか、どんな風に君を呼びましたか、その声は。

瀬川丑松 丑松、丑松とつづけざまに。

風間敬之進 君の名前を？

土屋銀之助 馬鹿なことを言いたまえ。そんな事があって堪るものか。

瀬川丑松 土屋君、確かに僕の名を呼んだんだよ。風が呻吟《うな》ったでも無ければ、

鳥が啼いたでも無い。どうしても阿爺だ。

土屋銀之助 本当かい？また欺《かつ》ぐつもりだろう。

瀬川丑松 僕は真面目なんだよ。確かに、この耳で聞いて来た。

土屋銀之助 君の父上《おとう》さんは西乃入《にしりのいり》の牧場に居るんだらう。

あの烏帽子《えぼし》ヶ嶽《だけ》の谷間《たにあい》に居るんだらう。

君の名前を呼ぶなんて馬鹿らしい。

瀬川丑松 だから不思議ぢゃないか。

土屋銀之助 不思議？智識の進んで来た今日、そんな馬鹿らしいことの有る筈が無い。

風間敬之進 しかし、土屋君。そう君のように一概に言ったものでもないよ。

島崎藤村 急に丑松は聞耳を立てた。また何か聞きつけたという風で、顔色を変えて、

恐れを表したのである。

瀬川丑松 や。また呼ぶ声がある。一寸、僕はもう一度行って来るから。

丑松、歩き回る。

島崎藤村 銀之助は友達のことを案じられる。敬之進はもう心に驚いてしまって、

何かの前兆《しらせ》では有るまいかと考えて。

風間敬之進 なあ、土屋君。こうして我々ばかり火鉢にあたって居るのも気掛かりだ。

どうでしょう、二人で行って見てやっては。

土屋銀之助 むむ、そうしましょうか。

敬之進と銀之助、丑松の後を追う。

島崎藤村 そして丑松は、深い想いに沈みながら、声のする方へ辿って行った。

校舎も、樹木も、何もかも今は夜の空気に包まれて、静まり返って、

闇に隠れて居るように見える。

島崎藤村 丑松、丑松。

瀬川丑松 阿爺《おとつ》さん、阿爺さん。

島崎藤村 と目的《あてど》もなく呼び返した。

土屋銀之助（丑松に）やあ、君はこんな所にいたのか。

島崎藤村 二人はしきりに丑松の顔を窺う。丑松から、また父の声がしたことを聞いた。

風間敬之進 土屋君、それ見たまえ。

土屋銀之助 どうしても、そんなことは理窟に合わん。きっと神経のせいだ。

瀬川丑松 そうかなあ。

土屋銀之助 だって考えて見たまえ。声の無いところに声が聞えたりするなんて、それは君の疑心が産み出した幻だ。

瀬川丑松 幻？

土屋銀之助 いわゆる疑心暗鬼という奴だ。耳に聞える幻だ。

瀬川丑松 そうかも知れないけど。

島崎藤村 丑松、丑松。

瀬川丑松 阿爺《おとつ》さん、阿爺さん。

土屋銀之助 どうしたい、君は。

瀬川丑松 今、また阿爺《おやぢ》の声が。

土屋銀之助 今？ 何にも聞えやしなかったぢやないか。

瀬川丑松 そうかねえ。

土屋銀之助 なんにも声なぞは聞えやしないうよ。

瀬川丑松 風間さん、どうでした。何か聞えましたか。

風間敬之進 いいえ。

土屋銀之助 風間さんにも聞えなければ、僕にも聞えない。まあ、僕は聞いたって信じられない。見たって信じられない。この手で触って、それからでなければ信じられない。はーはー。それはそうと、馬鹿に寒く成って来たぢやないか……行こうか。

一幕二場

藤村が来る。

島崎藤村

翌朝。下宿から使いの者が学校にやって来て、丑松に逢いたいと言う。使いの者から一通の電報を受け取った。開封して見ると、片仮名の文字で、父が死去した。という知らせが書いてあった。半信半疑で繰返し読んだ。確かに死去の知らせだった。発信人は根津の叔父。『すぐ帰れ』としてある。

敬之進が来る。

風間敬之進

父が死去したのは、西乃入《にしのいり》牧場の番小屋であった。叔父は丑松の帰村を待受けて、一緒に牧場へ出掛ける心算《つもり》であったので、丑松を炉端に座らせ、亡くなった父の物語を始めた。

島崎藤村

炉の火は盛んに燃えた。

風間敬之進

叔母もすすり上げながら耳を傾けた。

島崎藤村

父の死去は、老の為でもなく、病の為でも無かった。まあ、言わば、職業の為に突然な最後を遂げたのであった。一体、父が家畜を愛する心は天性に近かったので、牧夫としての経験も深く、人にも頼まれ牧場の持主にも信ぜられた位。よもやあの老練な人が手ぬかりなどのあるうとは思われない。そこがそれ、人の一生の測りがたさで、ある種牛を預った為に、意外な出来事を引き起したのであった。

風間敬之進

種牛というのは 質《たち》が悪かった。

島崎藤村

もつとも、多くの牝牛《めうし》の群の中へ、一頭の牡牛《おうし》を

放つのである。広々した牧場の自由と、誘うような牝牛の鳴声とは、その牝牛を狂うばかりにさせた。荒々しい野獣に帰って、行方《ゆくえ》が知れなくなってしまう。三日たっても来ない。四日経っても帰らない。

風間敬之進

さあ、父は心配して、深い沢を分けて日の暮れるまで探して、山を渡り、高い声で呼んで見たりしたが、牝牛はどこにもいなかった。父はいつも遠くへ行く時、必ず昼飯を用意して、鎌《かま》や、鉞《なた》と一緒に籠《かご》に入れて出掛ける。ところが、その日に限っては持たなかった。

いつになっても帰らない。手伝いの男も不思議に思いながら、塩を与える為に牛小屋のあるところへ上って行くと、牝牛の群が喜ばしそうに集まって来る。そのなかには、例の種牛もとぼけ顔に交って居た。見れば角は紅く血に染まっていた。驚いて人々と一緒になって取押えたが、もう疲れていたせいか抵抗するでもなかった。それから、皆で父を探した。

風間敬之進

ようやく 岡の熊笹の中に倒れているところを捜し当てて、肩に掛けて番小屋まで連れ帰ると、手当も何も届かない程の深傷《ふかで》。叔父が駆け付けた時は、まだ父はすっかり居た。叔父が兄貴に、何か言っておくことはねえか、と尋ねたら、苦しい中で、

島崎藤村

俺も、牛の為に倒れるのは本望だ。今となっては何にも言うことはねえ。ただ気にかかるのは丑松のこと。今日までの苦労は、皆なあいつの為を思うから。日頃から俺は堅く言聞かせて置いたことがある。どうか丑松に、それを忘れるな、そう言っておくれ。

風間敬之進

叔父は、なお言葉を継いで、

島崎藤村

それから、葬式は根津のお寺でしねえように、俺が亡くなったとは、小諸の向町へ知らせずにおいておくれ。とそう言うから「むむ、解った、解った」と言ったよ。それが嬉しかったと見え、ポロポロと涙をこぼした。それぎり、もう兄貴は口を利かなかった。

風間敬之進

こういう父の臨終の物語は、言うに言われぬ感覚を丑松の心に与えた。

島崎藤村

やがて丑松は叔父と一緒に、西乃入牧場を指して出掛けることになった。

風間敬之進

万事は叔父の計らいで、検屍も済み、棺も間に合い、通夜の僧は根津の定津院《じょうしんいん》の長老を頼んで、既に番小屋の方へ登って行ったとのこと。葬式の用意は一切叔父が呑込んでいた。丑松は出掛けさえすればよかった。ここから烏帽子ヶ獄の麓まで二十町あまり。田沢の峠などを越して、寂しい山道を辿らなければならぬ。

島崎藤村

丑松は先に立って、提灯の光に夜路を照らし叔父を導いた。人里を離れ、道は細く、落ち朽ちた木の葉を踏み分けて、わずかに足跡があるばかり。

丑松が少年の時代に父に連れられて、行ったり来たりしたところである。

風間敬之進

牛小屋のある高原の上へ出る前に、二人はいくつか小山を越えた。

猪子の妻が来る。

猪子の妻

谷を下るとそこがもう番小屋で、人々は狭い部屋の内集っていた。

風間敬之進

木魚《もくぎよ》の音も山の空気に響き渡って、流れる川のささやきが、一層の寂しさあわれさを添える。炭焼、山番、この牛飼の生活。いずれも荒くれた山住まいである。

島崎藤村

丑松は提灯を吹消して、叔父と一緒に番小屋の戸を開けて入った。

風間敬之進

定津院の長老、世話人と言って姫子沢の組合、その他、父が生前懇意にした農家の者。それらの人々から丑松は親切な弔辞《くやみ》を受けた。

島崎藤村

仏前の燈明は線香の煙に交る夜の空気を照らして見える。遺骸《なきがら》を納めたというは、ごく粗末な棺。

猪子の妻

読経も きりになった頃、僧の注意で、年老いた牧夫の見納めの為にかわるがわる棺の前に立った。死別の涙は人々の顔を流れたのである。

丑松も叔父に導かれ、薄暗いロウソクの灯に最後の別れを告げた。

風間敬之進

見れば父は孤独な牧夫の生涯を終って、土深く横たわる時を待つかのよう。死に顔は冷かに蒼めて、血の色も無く変わりてた。叔父は、あの世の旅の便りにもと、編笠、草鞋《わらじ》、竹の輪などを取添え、別に魔除け

と言って、刃物を棺の上に載せた。一夜はこういう風に語り明かした。

島崎藤村

小諸の向町へは通知して呉れるなどいふ遺言もあるし、それに引越してこのかた十七年も、こちらから知らせなければ、向うからも来なかった。

昔の『お頭』が亡くなったと、下手にやって来られては迷惑する。

猪子の妻

と、叔父は、そればかり心配して居た。やがていよいよ野辺送りを為ることになった時は、住み慣れた番小屋の軒を担がれて出た。

島崎藤村

棺の後には定津院の長老、つづいて二人の子坊主、丑松は叔父と一緒に

藁草履穿《わらぞうりばき》、女はいずれも白の綿帽子を冠った。人々は

紋付もあれば手織縞《ておりじま》の羽織もあり、山家の習いとして多くは袴も着けなかった。

猪子の妻

棺は間もなく墓と定めた場処へ移されたので、そこには掘起された土が盛られ、咲残る野菊の花も踏散らされてあった。人々は土を掴んで、

穴をめがけて投入れる。叔父も丑松も投入れた。

風間敬之進

小山の形の土饅頭がそこに出来上るまで、丑松は考え深く眺め入った。叔父も無言であった。

島崎藤村

父は丑松の為に『忘れるな』の一語《ひとこと》を残して、

牧場の土深く埋もれた。もうこの世の人では無かったのである。

お志保が来る。

お志保 蓮華寺《れんげじ》では下宿を兼ねた。丑松が急に引越しを思い立ち、借りる事にした部屋は、蔵裏《くり》続きにある二階の角のところ。

蓮太郎が来る。

猪子蓮太郎 寺は信州 下水内郡《しもみのちごおり》飯山町二十何ヶ寺の一つ、二階の窓に寄りかかって眺めると、銀杏の大木や飯山の町も見える。

お志保 さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前《めのまえ》に見るような小都会、奇異な北国風の屋造《やづくり》、板葺の屋根、または冬期の雪除

《ゆきよけ》として使用する特別の軒庇《のきびさし》から、寺院と樹木の梢まで。すべて旧めかしい町の風景が香の煙の中に包まれて見える。ひと際、目立って望まれるのは、丑松が奉職している小学校の白く塗った建物。

猪子蓮太郎 丑松が引越しを思い立ったのは、甚だ不快に感ずることが今の下宿に起ったからで、もつとも賄いでも安くなければ、誰もこんな部屋に満足するものは無かろう。壁は壁紙で張りつめて、それが茶色になって居た。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、何となく世離れた僧坊であった。

お志保 今の下宿には、半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て来た大日向《おおひなた》という大尽《だいじん》、飯山病院へ入院の為とあって、しばらく泊って居たことがある。入院は間もなくであった。

猪子蓮太郎 もとより病室は第一等、看護婦の肩に懸って長い廊下を往復するうちに、おのずと豪奢《ごうしゃ》《ごうしゃ》が目について、誰が嫉妬で噂するともなく、あれは穢多《えた》だ。

猪子蓮太郎 ということになった。多くの病室に伝わって、患者は総立ち。

お志保 追い出してしまえ、それが出来ないならば、こぞって御免こうむる。

猪子蓮太郎 と院長を脅かすという騒動。いかに金尽《かねづく》でも、この人種の偏執《へんしゅう》には勝たれない。ある日の暮、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠はそのままとの下宿へ、院長は毎日来て、診察する。さあ今度は下宿のものが承知しない。

お志保 丑松が一日の務めを終って、下宿に帰った時は、

猪子蓮太郎 主婦《かみさん》を出せ。

お志保 と、騒ぎ立てるところ。

猪子蓮太郎 不浄だ、不浄だ。

お志保 無遠慮な人々の口唇をついて出た。

猪子蓮太郎 「不浄だとは何だ」と丑松は心に憤って、

お志保 あの大日向の不幸を憐れんだ。穢多の種族の悲惨な運命を思いつづけた。

丑松もまた穢多なのである。

猪子蓮太郎 丑松は純粹な北部の信州人。佐久小県《さくちひさがた》の岩石の間に

成長した若者の一人とは誰の目にも受取れる。正教員という格につけられ、学力優等の卒業生として、長野の師範校を出たのは二十二の年齢《とし》。

お志保 世の中へ突出される、すぐに丑松はこの飯山へ来た。

猪子蓮太郎 それから足掛三年目の今日、丑松はただ熱心な青年教師として、飯山の人に

知られているのみで、実際穢多である、新平民であるということは、誰一人として知るものが無かったのである。

奥様が来る。

奥様 では、いつ引越していらっしやいますか。

猪子蓮太郎 と、入って来たのは蓮華寺の住職の匹偶《つれあい》。

お志保 瘦せた白い手に珠数《じゅず》を持ちながら、丑松の前に立った。

丑松が来る。

瀬川丑松 「奥様」と崇められて居るこの有髪《うはつ》の尼は、多少教育もあり、

都の生活も知らないでもない口の利き振であった。世話好きな性質を額にあらわして、口癖のように念仏して、返事を待つて居る様子。

お志保 その時、丑松も考えた。明日にも、今夜にも、と言いたい場合ではあるが、

さて差当って引越しするだけの金がなかった。実際持合せは四十銭しかなかった。四十銭で引越しの出来よう筈もない。今の下宿の払いもしなければならぬ。月給は明後日でなければ渡らないとすると、いやでもそれまで待つより外はなかった。

瀬川丑松 こうしましょう、明後日の午後ということにしましょう。

奥様 明後日？

猪子蓮太郎 と奥様は不思議そうに相手の顔を眺めた。

瀬川丑松 明後日引越すのは、そんなにおかしいでしょうか。

奥様 でも明後日は二十八日ぢやありませんか。別におかしいということは御座

いませんがね、私はまた月が変わってからいらっしやるかと思ひましてサ。

瀬川丑松 いや、実は私も急に引越しを思ひ立ったものですから。

お志保 と何気なく誤魔化して、丑松はわざと話を交えてしまった。

猪子蓮太郎 下宿の出来事は烈しく胸を騒がせる。それを聞かれたり、話したりするのは怖い。穢多に関する事は、いつも避けるようにするのが癖である。

奥様 なむあみだぶ。

お志保 奥様は別に深く掘って聞こうともしなかった。

お志保、去る。

瀬川丑松 蓮華寺を出たのは五時であった。

猪子蓮太郎 丑松は学校の日課を終ると、書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱えて、鷹匠《たかしょう》町の下宿の方へ帰って行った。

瀬川丑松 町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が群れていた。中には、何かひそひそ立話をして居るものもある。

奥様 本町の雑誌屋は近頃出来た店。その前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くように張出してあった。

瀬川丑松 かねて新聞広告で見て、出版の日を楽しみにして居た

猪子蓮太郎 「懺悔録」

奥様 肩に猪子蓮太郎氏著、定価も書添えた広告が目につく。丑松はもう胸の踊るような心地《こち》がしたのである。

瀬川丑松 見れば二、三の青年が店頭《みせさき》で、新しい雑誌をあさって居る。

猪子蓮太郎 丑松は色をあせたズボンの袖囊《かくし》へ手を突込んで、銀貨を鳴らして見ながら、その雑誌屋の前を行ったり来たりした。

瀬川丑松 兎に角、四十銭あれば本が手に入る。しかし今、買ってしまえば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。

猪子蓮太郎 こういう考えに制せられて、一旦は行きかけて、また引返した。

奥様 ぬっと暖簾《のれん》を潜って入って、手に取って見る。それはすこし匂いのするような、粗悪な黄色い表紙に

猪子蓮太郎 「懺悔録」

奥様 としてある本。

瀬川丑松 貧しい人の手にも触れさせたいという思いから、わざと質素な体裁を選んだのは、この本の性質をよく表している。

猪子蓮太郎 多くの青年が読んで知るといふ今の世の中に、飽くことを知らない丑松のような年頃で、どうして読まず知らずに居ることが出来よう。

瀬川丑松 智識は一種の饑渴《ひもじさ》である。

奥様 四十銭を取出して、本を買求めた。

瀬川丑松 なけなしの金とは言え、精神《こころ》の慾には替えられなかった。

奥様 本を抱いた丑松が下宿に帰って行くと、途中で学校の仲間に出会った。

銀之助が来る。

土屋銀之助 瀬川君、大層遅いぢやないか。

奥様 と銀之助は近づいた。

猪子蓮太郎 正直で、しかも友達思いの銀之助は、すぐに丑松の顔色を見て取った。

奥様 深く澄んだ目付は以前の快活な色を失って、言うに言われぬ不安の光を帯びて居たのである。

土屋銀之助 きつと体の具合でも悪いのだろう。

奥様 と銀之助は心に考えて、丑松から下宿を探しに行った話を聞いた。

土屋銀之助 君はよく下宿を取替える人だねえ。こないだ引越したばかりぢやないか。
猪子蓮太郎 と毒のない調子で、笑った。

奥様 その時、丑松の持つて居る本が目についたので、銀之助は、見せろという言葉と一緒に右の手を差出した。

瀬川丑松 これかね。

奥様 と丑松は微笑みながら出して見せる。

土屋銀之助 むむ、「懺悔録」か。相変らず君は猪子先生のものが好きだ。

猪子蓮太郎 銀之助は、本の表紙を眺めたり、内部《なか》を開けて見たりして、
土屋銀之助 新聞の広告にもあったツケ。へえ、こんな本かい。まあ君は愛読を通り

越して崇拜だよ、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。さぞかし
また聞かせられることだろうなあ。

瀬川丑松 馬鹿言いたまえ。

猪子蓮太郎 と丑松も笑って本を受取った。

瀬川丑松 夕靄《ゆうもや》は低く集って、そこ、ここに灯《あかり》がつく。

奥様 丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すという話をして、この友達と別れた。

やがて少し行って振返って見ると、銀之助は往來の片隅に佇んだまま、
こちらを見送っていた。半町ばかり行ってまた振返って見ると、まだ友達は
同じところに佇んでいるらしい。

瀬川丑松 夕餐《ゆうげ》の煙は町の空をこめて、悄然《しよんぼり》とした友達の姿
も黄昏がれて見えたのである。

一幕四場

猪子の妻が来る。

猪子の妻 鷹匠町の下宿近く来た頃には、鉦《かね》の音《ね》があちこち響いた。

寺々の宵の勤行《おつとめ》は始まったのであろう。下宿の前まで来ると、あたりを警《いまし》める声も聞えて、提灯《ちょうちん》の光に宵闇の道を照しながら、一挺《ちよう》の籠が出るところであった。

藤村が来る。

島崎藤村 ああ、大尽が忍んで出るのであろう、と丑松は憐れんで、黙然《もくねん》として突立って見ているうちに、いよいよ、それは附添の男で知れた。同じ宿に居たとは言いながら、丑松は大日向を見かけたことが無い。ただ附添の男ばかりは、よく菓の罍《びん》などを提げて、出たり入ったりするところを見かけたのである。

猪子の妻 その雲を突くような大男が、主人を保護したり、人足を指図したりする甲斐甲斐しさ。穢多の中でも卑しい身分のものと見え、そこに立って居る丑松も同じとは夢にも知らないで、妙に人を憚《はばか》るようにして、会釈《えしゃく》しながら側を通りぬけた。

島崎藤村 下宿の内は何となく騒々しい。人々は激昂したり、憤慨したりして、いずれも聞えよがしに罵って居る。

島崎藤村 下宿の主婦は籠の側へ駈寄って、
猪子の妻 ありがとうぞんじます、そんなら御気をつけなすって。

島崎藤村 籠の内の人は何とも答えなかった。籠は担がれて出たのである。
猪子の妻 ざまあ見やがれ。

島崎藤村 これが下宿の人々の最後に揚げた凱歌であった。

奥様が来る。

奥様 丑松が蒼ざめた顔をして、下宿の軒を潜った時は、人々は廊下に群がっていた。いずれも感情を制えきれないという風で、肩を怒らして歩くもあり、板の間を踏み鳴らすもあり、中には塩を掴んで庭にまきちらす弥次馬もある。

島崎藤村 哀憐《あわれみ》、恐怖《おそれ》、千々の思は烈しく丑松の胸中を往来した。

奥様 病院から追われ、下宿から追われ、残酷な待遇《とりあつかい》と恥辱《はづかしめ》をうけて、黙って担がれて行く、大日向の運命を考えると、

さぞ籠の中の人は、嘆きの涙を流したであろう。

猪子の妻 大日向の運命は、すべての穢多の運命である。

島崎藤村 思えば、ひとごとでは無い。

猪子の妻 長野の師範校時代から、この飯山に奉職の身となったまで、よくまあ自分は平氣の平左で、普通の人と同じような量見で、危ないとも恐ろしいとも思はずに通り返して来たものだ。

奥様 丑松は「阿爺《おとつ》さん、阿爺さん。」

島崎藤村 と口の中で呼んで、自分の部屋を歩いて見た。

猪子の妻 ふと、父の言葉を思い出した。

奥様 はじめて丑松が親元を離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるという風で、様々な物語をして聞かせたのであった。

島崎藤村 その時だ。一族の祖先のことも言い聞かせたのは、

猪子の妻 東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のように、

奥様 朝鮮人、支那人、露西亜《ロシア》人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人とは違い、その血統は古《むかし》の武士の落人《おちうど》から伝ったもの、貧苦こそすれ、罪惡の為に穢れたような家族ではないと言いかせた。

猪子の妻 父はまた、世に出て身を立てる穢多の子の秘訣を伝えた。唯一つの希望《のぞみ》、唯一つの方法《てだて》、それは身の素性を隠すより外にない、

島崎藤村 たとえいかなる目を見ようと、いかなる人に巡り合おうと決して自白

《うちあ》けるな、一旦の憤怒《いかり》悲哀《かなしみ》に、この戒《いましめ》を忘れたら、その時こそ世の中から捨てられたものと思え。

奥様 父の教えた一生の秘訣とは、

島崎藤村 隠せ。

猪子の妻 戒はこの一語《ひとこと》で尽きた。しかし、その頃はまだ無我夢中、

奥様 阿爺《おやぢ》が何を言うか

猪子の妻 位に聞流して、丑松は勉強が出来るという嬉しさに家を飛出したのであった。島崎藤村 楽しい空想の時代は父の戒も忘れ勝ちに過ぎた。

奥様 急に丑松は少年《こども》から大人に近づいたのである。

猪子の妻 急に自分のことがわかって来たのである。

奥様 今は自分から

猪子の妻 隠そうと

島崎藤村 思うようになった。

敬之進が来る。

風間敬之進 丑松は畳の上へ倒れて、しばらく身動きもせずに考えていた。

丑松が来る。

瀬川丑松 やがて疲れが出て眠ってしまった。不意に目が覚めて、部屋を見廻した時は、

点けて置かなかった筈の洋燈《ランプ》が寂しそうに照して、夕飯の膳も

片隅に置いてある。自分は未だ洋服のまま。

風間敬之進 丑松の心地《ころもち》には一時間余も眠ったらしい。

瀬川丑松 戸の外には時雨《しぐれ》の降りそそぐ音もする。

風間敬之進 起き直って、買って来た本の黄色い表紙を眺めながら、膳を引寄せた。

飯櫃《おはち》の蓋を取って、あつめた飯の匂いを嗅いで見ると、丑松はもう、そこそこにして膳を押遣《おしや》だったのである。

蓮太郎が来る。

猪子蓮太郎 『懺悔録』

瀬川丑松 を、ひろげて置いて、先ず残りの巻煙草《まきたばこ》に火を点けた。

猪子蓮太郎 この本の著者、猪子蓮太郎

風間敬之進 の思想は、今の世の下層社会の『新しい苦痛』を表すと言われている。

人によると、あの男ほど自分を吹聴するものはないと言って、妙に毛嫌するような手合もある。なるほど、その筆にはいつも一種の神経質があった。

蓮太郎は、自分を離れて話しをすることの出来ない人であった。

猪子蓮太郎 しかし思想が剛健で、しかも観察の精緻《せいち》を兼ねて、人を引き付ける力の溢れているということは、

瀬川丑松 その著述を読んだものの誰しも感ずる特色なのである。

風間敬之進 蓮太郎は貧民、労働者、または新平民等の生活状態を研究して、社会の下層を流れる清水に掘りあてるまでは、倦《う》まず撓《たわ》まず努めるばかりでなく、またそれを読者の前に突きつけて、

猪子蓮太郎 右からも左からも説明《ときあか》して、呑込めないと思うことは何度繰返しても、読者の腹《おなか》の中に置かなければ承知しない

風間敬之進 というやり方であった。もっとも蓮太郎のは哲学とか経済とかの方面からそういう問題《ことがら》を取扱はないで、

猪子蓮太郎 むしろ心理の研究に基礎《どだい》を置いた。

風間敬之進 文章は ただ岩石を並べたように思想を並べたもので、

瀬川丑松 露骨《むきだし》などところに人を動かす力があつたのである。

風間敬之進 しかし丑松が蓮太郎の書いたものを愛読するのは、それだけの理由から

ではない。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎という人物が

穢多の中から産れたといふ事実は、丑松の心に深い感動を与えた。

瀬川丑松 ひそかに先輩として慕って居るのである。

猪子蓮太郎 同じ人間でありながら、自分等ばかり軽蔑される道理が無い、といふ烈しい

意気込を持つようになったのも、

風間敬之進 実はこの先輩の感化であつた。こういう訳から、蓮太郎の著述といえ

瀬川丑松 必ず買って読む。

猪子蓮太郎 雑誌に名が出ると、必ず目を通す。

風間敬之進 読めば読む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて

行かれるような気がした。今度の本は、

猪子蓮太郎 我は穢多なり

瀬川丑松 といふ文句で始めてあつた。

猪子蓮太郎 その中には、著者の煩悶の歴史、歎《うれ》し哀《かな》しい過去の追想

《おもいで》、精神の自由を求めて、しかもそれが得られないで、不調和な

社会の為に苦しみぬいた懷疑《うたがひ》の昔語《むかしがたり》から、

瀬川丑松 朝空を望むような新しい生涯に入るまで。書きあらわしてあつた。

猪子蓮太郎 新しい生涯

風間敬之進 それが蓮太郎には偶然な身のつまずきから開けたのである。

瀬川丑松 生れは信州高遠の人。

猪子蓮太郎 古い穢多の宗族《いえがら》ということは、長野の師範校に心理学の

講師として来て居た頃

風間敬之進 丑松がまだ入学しない以前《まえ》

猪子蓮太郎 同じ南信の地方から出て来た二三の生徒の口から泄《も》れた。講師の中に

賤民《せんみん》の子がある。この噂が全校にひろがった。

風間敬之進 ある人は蓮太郎の人物を、ある人はその容貌を、

瀬川丑松 ある人はその学識を、

猪子蓮太郎 いずれも穢多の生れとは思われな

風間敬之進 出て行け、出て行け。

猪子蓮太郎 声は一部の教師仲間の嫉妬から起つた。無理が通れば道理が引込む

猪子蓮太郎 という、この世の中に、誰が穢多の子の追放を不当だと言

風間敬之進 いよいよ蓮太郎が身の素性を自白して、

猪子蓮太郎 多くの校友に別れを告げて行く時、

風間敬之進 この講師の為に同情《おもいやり》の涙を流すものは
猪子蓮太郎 一人もなかった。

風間敬之進 蓮太郎は師範校の門を出て、『学問の為の学問』を捨てたのである。

瀬川丑松 この当時の事は『懺悔録』の中に、くわしく記載してあった。

猪子蓮太郎 丑松は、身につまされ幾度《いくたび》か本を閉じて、目を瞑《つぶ》った、
瀬川丑松 やがて読むのが苦しくなって来た。

蓮太郎、去る。

瀬川丑松 同情《おもいやり》は妙なもので、反って底意を汲ませないことがある。

風間敬之進 蓮太郎の筆は、面白く読ませるといっても、考えさせる方だ。丑松も書いてあることを離れて、自分の一生ばかり思いつづけながら読んだ。

瀬川丑松 今日まで私が平和な月日を送って来たのは、主に少年時代からの境遇

にある。元々は小諸の向町《むかいまち》の生れ。北佐久の高原に散布する
新平民の種族の中でも、ことに四十戸ばかりの一族《いちまき》の

『お頭《かしら》』と言われる家柄であった。獄卒《ろうもり》と捕吏

《とりて》とは、維新前まで、先祖代々の職務であって、父はその監督の
報酬として、租税を免ぜられた上、別に俸米《ふち》をあてがわれた。

風間敬之進 それ程の男であるから、貧苦と零落との為、小県郡の方へ家を移した

時にも、八歳の丑松を小学校へやることは忘れなかった。丑松が根津村

《ねづむら》の学校へ通うようになってからは、もう普通《なみ》の児童

《こども》で、誰もこの可憐な新入生を穢多の子と思うものはなかった
のである。過去の記憶が丑松の胸の中に復活《いきかえ》った。

瀬川丑松 七つ八つの頃まで、よく他の子どもにも調戲《からか》われたり、

石を投げられたりした、その恐怖《おそれ》の情はふたたび起って来た。

朦朧《おぼろげ》ながらあの小諸の向町に居た頃のことを思い出した。

移住する前に死んだ母親のことなどを思い出した。

風間敬之進 『懺悔録』を読んで、反《かえ》って丑松はせつない苦しみを

瀬川丑松 感ずるようになった。

暗転

二幕一場

お志保が来る。

お志保 毎月二十八日は月給の日とあって、学校では人々の顔付も引立って見えた。授業の終を告げる大鈴が鳴ると、教員はいづれも早々に書物を片付けて、受け持ちの教室を出た。

銀之助が来る。

土屋銀之助 悪戯盛《いたづらざか》りの少年の群は、一時に溢れて、その騒がしき。

お志保 弁当草履を振廻し、『ズック』の鞆を肩に掛けたりして、帰って行った。

土屋銀之助 丑松もまた高等四年の一組を済まして、生徒達の中を職員室へと急いだ。

お志保 校長は応接室に居た。

蓮華寺の住職が来る。

お志保 この人は郡視学が変わると一緒にこの飯山へ転任して来たので、丑松や銀之助よりも後から入った。学校の方から言うと、二人は校長の小舅《こじゅうと》にあたる。

土屋銀之助 その日は郡視学と町会議員たちが来て、校長の案内で授業を覗いて回った。郡視学が校長に与えた注意というは、

蓮華寺の住職 職員の監督、黒板机腰掛などの器具の修繕、学生に流行する『トラホオム』の衛生法等、主に児童教育の形式に関したことであった。応接室へ帰って、一同雑談で持切って、室内に籠る煙草の煙は白い渦のよう。

お志保 この校長に言わせると、教育は則ち規則であるのだ。郡視学の命令は上官の命令であるのだ。軍隊風に児童を教育したいと言うのが校長の主義で、日々の挙動も生活もすべてそこから割出してあった。時計のように正確に。これが座右の銘あり、職員を指揮する精神でもあった。

土屋銀之助 世間を知らない青年教育者の口癖に言うようなことは、無用な人生の装飾《かざり》としか思わなかった。この主義で押通したのが遂に成功して、

お志保 蓮華寺の住職 功績表彰の文字を彫刻した名譽の金牌《きんぱい》を授与されたのである。土屋銀之助 その一生の記念が今、応接室の机の上に置いてあった。

蓮華寺の住職 人々の視線は黄金の輝きに集まった。町会議員はその見積りの代価を、心に推測したり感嘆したりして眺めた。

お志保 十八金、直径《さしわたし》九分、重量《めかた》五匁《ごもんめ》、代価

およそ三十円。これが人々の一致した評価で、添えてある表彰文には、
県下教育に貢献するところ尠《すくな》からずと書いてあった。

蓮華寺の住職 基金令第八条の趣旨に基き、金牌を授与し、表彰する。とも書いてあった。

お志保 これは校長先生の御名譽ばかりぢやありません、信州教育界の名譽です。

蓮華寺の住職 と髯《ひげ》の白い町会議員は改って言った。金縁眼鏡の議員は、

お志保 つきましては、有志の者が寄りまして御祝の印ばかりに祝杯を差上げたい
と存じますが、いかがでしょう、今晚三浦屋まで御出《おいで》を願えま
しょうか。郡視学さんも、どうか、まあ是非。

土屋銀之助 いや、そういう御心配に預りましては実に恐縮します。

蓮華寺の住職 今回のことは、教育者に取りましてもこの上もない名譽な次第で、非常に

私も嬉しく思っているのですが。考えて見ますと、これぞ、と言った功績
があった私ではない。こういう金牌を頂戴して、恥ずるような次第で。

お志保 校長先生、そうおっしゃっては、使いに来た私共が困ります。

土屋銀之助 瘦せぎすな議員が右から手を擦みながら言った。

蓮華寺の住職 どうですな、貴方《あなた》の御都合は。

お志保 と言われて、郡視学は微笑みを口元にたたえながら、

土屋銀之助 せっかく、ああ言って下さる。御厚意を無にするのは失礼でしょう。

蓮華寺の住職 御尤《ごもっとも》です。どうか皆さんも、よろしく仰って下さい。

土屋銀之助 と校長は丁寧にあ挨拶した。

お志保 実際、地方の事情に遠いものは校長の現在の位置を十分会得することが
出来ないであろう。地方に入って教育に従事するものの第一の要件は、

土屋銀之助 外でもない、この校長のような凡俗な心づかいだ。

お志保 かつて学校の窓で想像した様々の高尚な事を、いつまでも考えて、俗悪な
趣味を避けるようでは、一日たりとも地方の学校の校長は勤まらない。

有力者なぞに、喜びもあり悲しみもあれば、土地の言葉も使える頃には、
自然と学問を忘れて、無教育な人にも馴染むものである。賢いと言われる
教育者は、いづれも町会議員などに結托して、位置の堅固を計るのが普通だ。

土屋銀之助 帰って行く人々の後に続いて、校長は見送って出た。

やがて 玄関で挨拶して別れる時、言葉を取り交わした。

お志保 では、郡視学さんも御誘い下すって、学校から直に御出を。

蓮華寺の住職 恐れ入りましたなあ。

お志保、去る。

蓮華寺の住職 小使。

猪子の妻が来る。

猪子の妻 へい、なんぞ御用でございますか。

蓮華寺の住職 ちよっと、気の毒だがねえ、もう一度役場へ行って催促して来てくれないか。金銭《おかね》を受取ったら直に持って来てくれ。

土屋銀之助 こう命じて、校長は応接室の戸を開けて入った。

蓮華寺の住職 見れば郡視学は巻煙草を燻《ふか》しながら、独りで新聞を読み耽っている。

土屋銀之助 見たまえ、この信濃毎日を。君が金牌を授与されたということなど、書いてあますよ。表彰文は全部。それに、履歴までも。

蓮華寺の住職 いや、今度の受賞は大変な評判になってしまいました。どこに行ってもその話が出る。実に意外な人まで知っていて、祝ってくれるような訳で。結構です。

蓮華寺の住職 これというのも貴方《あなた》の御骨折から。

土屋銀之助 御互様のことですからな。は、は、は。君のお喜びも御察し申す。

蓮華寺の住職 勝野君も非常に喜んでくれましたね。

土屋銀之助 甥《おい》がですか、そうでしたらう。私のところにも長い手紙をよこしましたよ。実際、甥は貴方の為を思っているのですからな。

猪子の妻 郡視学が甥と言ったのは、検定試験を受けて、合格して、この頃新しく赴任して来た正教員。勝野文平というのがその男の名である。

割合に新参の校長は文平を引立てて、自分の味方につけようとしたので。もつとも席順から言えば、丑松は首座。生徒の有望は校長の上にある程。いかに校長でも、その位置を動かす訳にはいかない。

蓮華寺の住職 それに引換え、瀬川君の冷淡なこと。

土屋銀之助 瀬川君？

蓮華寺の住職 まあ聞いて下さい。万更《まんざら》の他人が受賞したでなし、定めし

瀬川君だって私の為喜んでくれるだろう、こう御考えでしょう。ところが大違いです。こりゃあ、まあ、私が直接に聞いたことではないのですけれど。というのは、教育者が金牌などを貰って鬼の首でも取ったように思うは大間違だと。そりゃあ、瀬川君に言わせたなら値打ちのないものでしょうが。どうしてまた瀬川君は、そんな考えを持つのだろう。

土屋銀之助

蓮華寺の住職 時代から言えば、あるいは 我々の方が多少遅れているのかも知れませんが、しかし新しいものが必ずしも、いいとは限りませんからねえ。なにしろ、瀬川君や土屋君が、ああして居たんぢゃ、私もやりにくくて困る。同志の者ばかり集って、一致して教育事業をやるんでなけりゃあ、到底、面白くないきません。勝野君が首座であつてくれると、大いに安心なんですけれど。

土屋銀之助 そんなに君が面白くないものなら、他の学校へ移すとか、後釜には君の
気に入った人を入れるとかサ。

蓮華寺の住職 同じ移すにしても、何か口実がないと。そこはうまくやらないと。あれで
瀬川君は、生徒たちに人望が有ますから。

土屋銀之助 そうさ、過失の無いものに向って、出て行けとも言われん。は、は、は、
余りまた細工をしたように思われるのも厭だ。まあ私の口から甥を褒める
でも有ませんが、貴方の為には、きっと御役に立つだろうと思えますよ。

瀬川君に比べると、勝るとも劣ることは、あるまいという積りだ。

瀬川君なぞ、どこがいいんでしょう。どうして、あんな教師に生徒が大騒ぎ
するんだか。私なんかには、さっぱりわからんねえ。

蓮華寺の住職 先ず、猪子蓮太郎あたりの思想でしょうよ。

土屋銀之助 むむ、あの穢多か。

蓮華寺の住職 はい。猪子のような男の書いたものが若いものに読まれるかと思えば
恐ろしい。不健全、不健全。今日の新しい出版物は皆な青年の身をあやまる
もとなんです。今の青年の思想は、どうも解りません。

猪子の妻 その時、応接室の戸を叩く音がした。急に二人は口をつぐんだ。また叩く。

蓮華寺の住職 お入り。

猪子の妻 と声をかけて、校長は椅子を離れた。町会議員からの使いでもあるか、
こう考えて戸を開けた。思いの外な一人の教師、

丑松が来る。

瀬川丑松 校長先生、何か御用談中ぢや、ありませんか。

猪子の妻 と丑松は尋ねた。校長は微笑んで、

蓮華寺の住職 いえ。別に、二人で御噂をしていたところです。

瀬川丑松 実は風間さんが、郡視学さんに御願いしたいことがあるそうです。

敬之進が来る。

土屋銀之助 何ですか、私に用事があると。

風間敬之進 あの、ですね。

猪子の妻 敬之進がぐずぐずして居るので、

土屋銀之助 どういうお話ですか。仰って下さらなければ解りませんなあ。

風間敬之進 少し。お願いしたいことがあまして。

土屋銀之助 ふむ。

猪子の妻 また室内は寂《しん》として、しばらく声がなくなった。

土屋銀之助 私はこれでも忙しいのです。なにか仰ることがあるなら、仰って下さい。

瀬川丑松 風間さん、そんなに遠慮しない方がいいぢや、ありませんか。私から

伺います。風間さんのように退職となった場合には、恩給を受けさせて
頂く訳に参りませんものでしょうか。

土屋銀之助 無論です、そんなことは。小学校令の施行規則を出して御覧なさい。

瀬川丑松 そりゃあ規則は規則ですけれど。

土屋銀之助 規則に無いことが出来るのですか。身体が衰弱して、職務を執るに
たえないから退職する。これをこちらで止める権利はありません。

恩給を受けられるという人は、満十五年以上在職したものに
限った話です。風間さんのは十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。

瀬川丑松 でも、わずか半年のことです。

土屋銀之助 それを許したら際限が無い。風間さんはすぐに家の事情だという。誰だって
家の事情のないものではありません。恩給のことなどは諦めて養生なさい。

瀬川丑松 どうです、風間さん。貴方からも御願いしてみても、

風間敬之進 いえ、今の御話を伺えば。私から御願するまでも、ありません。

お言葉に従って、諦めるより外はないと思います。

蓮華寺の住職 その時、小使が重たそうな風呂敷包を提げて役場から帰って来た。

猪子の妻 この知らせを機《しお》に、郡視学は校長に送られて、部屋を出た。

二幕二場

椅子を持った、藤村が来る。

島崎藤村 それは忘れることの出来ないほど寂しい旅であった。こうして千曲川の岸に添うて、懐かしい故郷の方へ帰って行く。丑松は、自分が殆んど別の人のような心地がする。足掛三年、と言えば、それほど長い月日とも聞えないが、丑松の身に取っては一生の変遷《うつりかわり》の始った時代であった。

椅子を持った、奥様が来る。

奥様 もっとも、人の境遇によつては変つたといふこともなしに、自然に世を隔てた様な感じのするものもあるうけれど。心の中の革命が丑松には猛烈に起つて、しかもそれを深く感ずるのである。

椅子を持った、丑松が来る。

瀬川丑松 自由な空気を呼吸して、自分の運命を悲しみ、生涯の変転に驚いたりして、無限の感慨に沈みながら歩いて行つた。

島崎藤村 時々丑松は立留つて、人目の無い路傍《みちばた》の枯草の上に倒れて、声を揚げて慟哭《どうこく》したいとも思った。いかんせん、泣きたくも、泣くことのない程、心は重く暗く閉ざされてしまつたのである。

奥様 漂泊する旅人は丑松の脇を通りぬけた。落魄の涙に顔を濡して、餓えた犬のように歩いて行くものもあつた。垢染《あかじ》みた着物を身にまといながら素足で土を踏んで行くものもあつた。

島崎藤村 飯山を離れて行けば行く程、次第に丑松は自由な天地へ出て来たような心地《こころもち》がした。北国街道の灰色な土を踏んで、花やかな日の光を浴び、時には岡に上り桑畠の間を歩み、時にはまた街道の両側に並ぶ町々を通り過ぎて帰つたのである。

瀬川丑松 道端の柿は枝もたわむばかりに黄な実を見せ、粟は穂を垂れ、既に刈取つた田畠には浅々と麦の萌《も》え初めたところもあつた。あちこちに聞える農夫の歌、鳥の声。ああ。

奥様 その日は山脈も面白く容《かたち》を顕《あらわ》して、山と山との間の深い谷には、青々と炭焼の煙が立登るのも見えた。蟹沢《かにざわ》の出はずれで、当世風の紳士を乗せた一台の人力車《くるま》が丑松に追付いた。見れば天長節の朝、演説した高柳利三郎。

瀬川丑松 代議士の候補者に立つものは、政見を発表する為に忙しくなる時節。いずれ選挙の準備《したく》として、地方廻りに出掛けるのであろう。

奥様 と見る丑松の側《わき》を、高柳は意気揚々として、すこし人を尻目にかけて、挨拶もせずに 通り過ぎた。

島崎藤村 二三町離れて、高柳は急に何か思付いたように、こちらを振返って見たが、丑松の方では気にも留めなかった。

瀬川丑松 日は次第に高くなった。水内《みのち》の平野は眼前《めのまえ》にひらけた。千曲川の流域で、川上から押流す泥砂が盛上ったところを見ても、氾濫の凄まじさが思いやられる。田島は遠く連ねて、櫛《けやき》の杜《もり》も、今は山も濃く青い空気を呼吸するよう、

奥様 うら枯れた中にも、自然の風趣《おもむき》を、よく表している。

瀬川丑松 汽車に乗るべきところへ着いたのは、午後二時頃。車で駈付けた高柳も、同じ列車を待ち合せて居たと見え、発車時間の近いた頃に休茶屋から来た。

瀬川丑松 どこへ行くのだろう、あの男は。

島崎藤村 丑松が、それとなく高柳の様子を窺うと、相手も丑松を注意して見るらしい。奥様 不思議なことには、何となく丑松を避けるという風で、成るべく顔を合すまいと勉めて居た。お互いに顔を知って居るといふ、ついで名乗ったことが有るでなし、二人は言葉を交そうともしなかった。

蓮太郎が来て、椅子に座り寝る。

島崎藤村 発車を報せる鈴の音が鳴った。乗客はいずれも中へと急いだ。盛んに黒煙をあげて直江津の方から上って来た列車はステーションに停った。丑松は

機関車よりの一室を選んで乗った。思わずそこに腰掛けて居た一人の紳士と顔を見合せた時は、あまりの奇遇に胸を打たれたのである。

瀬川丑松 猪子先生。こんにちは。

奥様 と丑松は挨拶した。

島崎藤村 紳士も、意外な処で、という驚いた顔つき。

藤村、椅子に座る。

猪子蓮太郎（起きて）おお、瀬川君でしたか。

奥様 夢寐《むび》にも忘れないその人の前に、丑松は偶然にも腰掛けたのである。実に巡り合いの唐突で、意外で、心の底の外面《そと》に現れた光景。

ガラスごしに風景を望んでいた一人の紳士、二人の様子を見比べた。

瀬川丑松 新聞で蓮太郎のことを読んで見舞状まで書いた丑松は、この先輩の案外元氣

のよいのを眼前《めのまえ》に見て、喜びもすれば不思議にも思った。かねて心配したり想像したりした程に身体《からだ》の衰弱《おとろえ》が目につくでも無い。眼は神経質な光を帯びて、悲壮な心の内を映して見せた。

想像したと見たとは大違いで、血を吐く重い病人のように受取れなかった。早速 丑松は、その事を言出して、

瀬川丑松 実は新聞で見ました。東京の御宅へ宛てて手紙を上げました。

猪子蓮太郎 新聞に、そんなことが出ていましたか。おそらく間違えでしょう。御覧の通り、旅行が出来る位ですから、どうか安心して下さい。

島崎藤村 聞いて見ると、蓮太郎は赤倉の温泉へ身体を養いに行つて、帰途《かえりみち》であるとのこと。そして、同伴《つれ》の人を丑松に紹介した。

瀬川丑松 老紳士は、かねて噂に聞いた信州の政客《せいかく》、この冬打つて出る代議士の候補者の一人、雄弁と男気で知られた市村弁護士であった。

島崎藤村 瀬川君とおっしゃるんですか。私は市村です。

猪子蓮太郎 市村君とは、偶然こんなに御懇意なつて、今では非常に御世話になっています。

島崎藤村 我輩こそ色々と御世話になつていたので。

瀬川丑松 深く聞いて見ると、これから市村弁護士は上田を始めとして、小諸、岩村田、

白田などの地方を遊説する為、政見発表の途《みち》に上るのであるとのこと。親しく佐久小県地方の有権者を訪問して選挙を争う意気込であるとのこと。

奥様 蓮太郎はまた、この友人の応援の為、一つには自分の研究の為、しばらく信州

に踏み止まりたいという考えで、今宵は上田に一泊、いずれ二三日の中には

弁護士と、丑松の故郷の根津村にも出掛けて行つて見たいとのことであった。

島崎藤村 そんなら、瀬川さんは今、飯山に御奉職《おいで》ですな。そこから候補者が

出ますね、御存じですか、あの高柳利三郎という男を。

奥様 蛇《じゃ》の道は蛇《へび》だ。弁護士はすぐにそれを言った。丑松は豊野の

ステーションで落合つたことから、今この同じ列車に乗込んで居るといふ

ことを話した。弁護士は不思議そうに首を傾《かし》げながら、

島崎藤村 何処へ行くのだろう。しかし、これだから汽車の旅は面白い。同じ列車の内に

乗合せていても、互いに知らずにいるのですからなあ。

瀬川丑松 こう言つて市村弁護士は笑つた。

猪子蓮太郎 駅々で列車が停ると、農夫の乗客が幾群か入込んだ。

瀬川丑松 今は笑声と無遠慮な雑談とで車内が満たされるようになった。

猪子蓮太郎 東海道沿岸などの鉄道とは違い、この荒寥《こうりょう》とした信濃路は、

汽車までも旧式で、窓のガラスに響いて烈しく動揺する。

島崎藤村 終《しまい》には談話《はなし》も、よく聞取れないことがある。

猪子蓮太郎 千曲川の水も、見れば大な谿流の勢に變つて、白波を揚げて谷底を下る。

奥様 濃く青く清々とした空気は窓から流れ込んで、

瀬川丑松 次第に高原へ近づいたことを感じる。

奥様 やがて、汽車は上田へ着いた。旅人の多くが下りた。蓮太郎たちも降りる。
猪子蓮太郎 瀬川君、いずれ根津で御目に懸ります。失敬。

蓮太郎と藤村、去る。

奥様 再会を約して行く先輩の後姿を、丑松は可懐《なつか》しそうに見送った。

急に室内は寂しくなったので、丑松は冷い鉄の柱に靠《もた》れながら、
瀬川丑松 眼を瞑《つむ》って、この意外な邂逅《めぐりあい》を思い浮べて見た。

奥様 何となく丑松は物足りなかった。あれほど打解けてくれて、わけ隔てのない
言葉を掛けられても、まだ丑松はどこかに他人行儀なところがあると考えて、
悲しくも情なくも思ったのである。

瀬川丑松 妬むではないが、あの老紳士の親しくするのが羨ましくも思われた。

奥様 その時になつて丑松も明《あきらか》に自分の位置を認めることが出来た。

瀬川丑松 先輩に対して起る心のやるせなさは、自分もまた同じように『穢多である』と
いう事実から湧上る。秘密を隠している以上、例え他の事を話したところで、
自分の想いが先輩に伝わる時はないのである。それを告白してしまつたら、
どんなに重荷が軽くなるであろう。先輩は驚いて、自分の手を執って、
君もそうかと喜んでくれるであろう。同じ運命という深い交際《まじわり》に
入るであろう。そうだ、せめて先輩だけは話そう。

奥様 こう考えて、丑松は楽しい再会の日を想像して見た。

猪子の妻が来る。

猪子の妻 教員は職員室に集っていた。その日は土曜日で、月給取りにとっては日曜より楽しく思われた。

お志保が来る。

お志保 ここに集る人々は、日々の勤務と、生徒の取扱とに疲れて、さして教育の事業に興味を感じるでもなかった。

敬之進が来る。

風間敬之進 ひと月の骨折の報酬を酒に代える為、待つて居るような連中もあった。

お志保 丑松は敬之進と職員室へ行こうとして、廊下のところで小使に出逢った。

猪子の妻 風間先生、笹屋の亭主が御目に懸りたいと言って、さっきからいやすよ。

お志保 不意を打たれて、敬之進はさも苦々しそうに笑った。

風間敬之進 何？笹屋の亭主？

猪子の妻 笹屋とは飯山の町にある飲食店、農夫の為に地酒を暖めるような店で、

敬之進が浮世を忘れる隠れ家ということは、丑松も承知して居た。けさ

月給の渡る日と聞いて、酒代の催促に来たか、とは敬之進の苦笑いで知れる。学校まで取りに来なくてもよさそうなものだ。いいから待たして置け。

お志保 と小使に言合めて職員室へと急いだのである。

風間敬之進 十月下旬の日の光はガラス窓から射入って、煙草の煙に交る室内の空気を

明く見せた。掲示板の下に一群、その時間表の側《わき》に一回《ひとかたまり》、いずれも口から泡を飛ばして言いののしって居る。丑松は部屋の入口に立って眺めた。郡視学の甥《おい》という勝野文平が、銀之助と並んで話している。

お志保 新しい艶のある洋服を着て、襟飾《えりかざり》の好みも煩《うるさ》くな
く、すべて適《ふさ》わしい風俗の中《うち》に、人を吸引《ひきつ》ける
敏捷《すばしこ》いところがあつた。

猪子の妻 美しく撫付《なでつ》けた髪の色黒さ。頬の若々しさ。

お志保 それにこの男の鋭い眼付は絶えず物を穿鑿《せんさく》するようで、一時
《いつとき》も静息《やす》んでは居られないかのよう。

風間敬之進 これを銀之助の五分刈頭、顔の色赤々として、形《なり》も振《ふり》も

関はず腕捲《うでまく》りしながら、談《はな》したり笑ったりする肌合に比べたら、その二人の相違はどんなであらう。

猪子の妻 物見高い女教師連の視線は文平の身に集った。

お志保 丑松は文平の瀟洒《こざっぱり》とした風采《なりふり》を見て、別に

それを羨む気にもならなかった。ただ気懸りなのは、あの新教員が自分と同じ地方から来たということである。小諸の地理にも詳しい様子から押して考えると、いつどこで瀬川の家話を聞かまいものでもなし、

猪子の妻 あの『お頭』は今これこれだと言う人でもあった日には。無論今となって

そんなことを言うものも有るまいが。あの教員も聞捨てにしまい。

お志保 丑松は猜疑深《うたがいぶか》く推量して、何となく油断がならない

ように思うのであった。

猪子の妻 不安な丑松の眼《まなこ》には心配の種が映って来たのである。

風間敬之進 校長は役場から来た金の調べを終った。それぞれ分配するばかりになった

ので、丑松は校長を助けて、人々の机の上に十月分の俸給を載せてやった。

お志保 毎月のことながら、俸給を受取った人々の顔付は格別であった。教員の身に

とっては、働いて得た収穫を眺めた時ほど愉快に感じることはない。

風間敬之進 ある人は紙の袋に封じたままの銀貨を鳴らして見る、ある人は風呂敷

に包んで提げて微笑んで見る。

猪子の妻 急に校長は用事ありげに立上った。何事かと人々は聞耳を立てる。校長は

器械的な改まった調子で、敬之進が退職のことを報告した。

お志保 就いては十一月の三日、この教育者の為に茶話会を開きたいと言出した。

猪子の妻 賛成の声は起る。敬之進は一礼して、やがて拍子の抜けたように席へ戻った。

風間敬之進 一同帰り仕度を始めたのは間も無くであった。

お志保 教員たちが敬之進を取り巻いて、慰めて居る間に、ついでと丑松は風呂敷包を

提《ひっさ》げて出た。

猪子の妻 銀之助が友達をさがして歩いた時は、職員室から廊下、廊下から応接室、

お志保 小使部屋、昇降口まで来て見ても、

猪子の妻 どこにも丑松の姿は見えなかったのである。

猪子の妻、去る。

風間敬之進 丑松は大急ぎで下宿へ帰った。

丑松が来る。

瀬川丑松 月給を受取って来て妙に気強いような心地《こころもち》にもなった。昨日

は湯にも入らず、煙草も買わず、早く蓮華寺へ、と思いあせるばかりで、暗い一日を過したのである。懐に一文もなく、笑うという気には誰がなろう。すっかり下宿の払いを済まし、車さへ来れば直に出掛けられるばかりに用意して、巻煙草に火を点けた時は、言うに言われぬ愉快を感じた。

瀬川丑松

引越は成るべく目立たないように、という考えであった。気掛りは下宿の主婦《かみさん》の迷惑で、追い出された大尽の間には一種の關係があつて、それで面白くなって引越すとも思はれたら、どうしよう。下手なことを言出せば藪蛇だ。『都合があるから引越す。』理由は其で沢山だ。

お志保

そして頼んで置いた車も来る。荷物と言えば、本箱、机、それに蒲団の包があるだけで、道具は一台の車で間に合つた。

お志保

丑松は洋燈《ランプ》を手に持って、主婦の声に送られて出た。

瀬川丑松

こうして車の後について、とぼとぼと歩き、下宿の方を一寸振返つた時は深い溜息をついた。道は悪し、車は遅し、

風間敬之進

丑松は一生の変遷《うつりかわり》を考え、自分の運命を想いながら歩いた。

瀬川丑松

寂しいとも、悲しいとも、おかしいとも、

風間敬之進

何ともかとも名の附けようのない心地《こころもち》は烈しく胸の中を往來し始める。秋の空氣が煙のように町々を引包んで居る。

お志保

途中で紙の旗を押立てた少年の一群《ひとむれ》に出遇つた。足拍子揃えて面白可笑しく歌つて来るのは尋常科の生徒だ。

瀬川丑松

一緒に歌いながらくる、酒酔いがある。よろよろした足元で敬之進と知れた。

風間敬之進

瀬川君、一寸まあ見て呉れ給え。これが我輩の音楽隊さ。

お志保

敬之進は何処かで飲んで来たものと見える。少年の群は一度にどつと声を揚げて、自分達の可傷《あわれ》な先生を笑つた。

風間敬之進

始めえ

お志保

敬之進は戯れに指揮するような調子で言つた。

風間敬之進

諸君。まあ聞き給え。こんにちまで我輩は諸君の先生だった。明日からは、もう諸君の先生ぢやない。そのかわり、諸君の音楽隊の指揮をしてやる。

瀬川丑松

よしか。解つたかね。あはゝゝゝ。

瀬川丑松

と笑つたと思うと、熱い涙はその顔を伝つて流れ落ちた。音楽隊は一斉に歡呼を揚げて通り過ぎた。

お志保

敬之進は、少年の群を見送つて居たが、やがて歩き初めた。

風間敬之進

まあ、君と一緒にそこまで行こう。時に瀬川君、まだこの通り日も暮れないのに、洋燈《ランプ》を持って歩くとは、どういう訳だい。

瀬川丑松

私ですか。私は今引越をするところです。

風間敬之進

引越か。それで君は何処へ引越すのかね。

瀬川丑松

蓮華寺へ。

お志保 蓮華寺と聞いて、敬之進は無言になった。しばらく、無言で歩いてから。
風間敬之進 ああ。実に瀬川君などは羨ましいよ。だって君、そうじゃないか。君などは
まだ若いんだもの。前途多望とは君のことだ。どうかして我輩も、もう一度
君のように若くなって見たいなあ。我輩のように老込んで駄目だねえ。
お志保 にわかに道も薄暗くなった。敬之進は嘆息したり、沈吟したりして、時々
絶望した人のように唐突《だしぬけ》に大きな声を出して笑った。

風間敬之進 浮世《ふせい》夢のごとし

瀬川丑松 それに勝手な節を付けて、低声に長く吟じた時は、妙に悲しいような、
可痛《いたま》しいような心地《こころもち》になった。

瀬川丑松 風間さん、貴方はどこまで行くんですか。

風間敬之進 我輩かね。我輩は君を送って、蓮華寺の門前まで行くのさ。

瀬川丑松 門前迄？

風間敬之進 なぜ我輩が門前まで送って行くのか、それは君には解るまい。しかし
それを今君に説明しようとも思はないのさ。御互いに長く顔を見合せて
居ても、こうして親《ちか》しくするのは昨今だ。まあ、いつか君と
ゆっくり話して見たいもんだねえ。

お志保 やがて蓮華寺の山門まで来ると、ふいと敬之進は別れて行ってしまった。

敬之進、去る。

瀬川丑松 奥様は蔵裏《くり》の外まで出迎えて喜ぶ。車はもうとつくに。荷物は

寺男の庄太が二階の部屋へ持運んでくれた。台所で焼く魚の匂いは、
蔵裏までも通って来て、香の煙に交って、住慣《すみな》れない私の
心に一種異様の感じを与える。

お志保 仏に物を供える為か、本堂の方へ通う子坊主もあった。二階の部屋も
窓の障子も新しく張替えて、前に見たよりはずっと心地《こころもち》が
好い。葉湯と言って、大根の乾葉《ひば》を入れた風呂なども立ててくれる。
新しい膳に向って、うまそうな味噌汁の香《におい》を嗅いで見た時は、
第一この寂しげな精舎《しょうじゃ》の古壁の内に

瀬川丑松 意外な家庭の温暖《あたたかさ》を看付《みつ》けたのであった。

二幕四場

藤村が来る。

島崎藤村

もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校に居る頃から、よく気性の合った友達で、丑松が佐久小県《さくちいさがた》

あたりの灰色の景色を説き出すと、銀之助は諏訪湖の畔

の生れ故郷の物語を始める、

猪子の妻が来る

猪子の妻

寄宿舎の窓は二人を結びつけ、同窓の記憶は今も若く青々として居る。

島崎藤村

銀之助は丑松のことを思う度に昔を思い出して、何となく時の変遷

《うつりかわり》を忍ばずにはいられなかった。同じ寄宿舎の食堂に同じ

引割飯の匂いを嗅いだ頃に思い比べると、丑松の様子の変つて来た

ことは。あの憂鬱。以前の快活さを失った証拠は、眼付で解る、

猪子の妻

歩き方で解る、話しをする声でも解る。

銀之助が来る。

土屋銀之助

一体、何が原因《もと》で、あんなに深く沈んで行くのだろう。

島崎藤村

とんと銀之助には合点が行かない。

土屋銀之助

何かある。必ず何か訳がある。

猪子の妻

こう考えて、どうかして友達に忠告したいと思うのであった。

島崎藤村

丑松が蓮華寺へ引越した翌日、午後から銀之助は尋ねて行った。

途中で文平と一緒にになって、二人して苔蒸《こけむ》した石の階段を上ると、

咲残る秋草の径《みち》の突当ったところに

猪子の妻

本堂、左は鐘楼、右が蔵裏であった。六角形の建築物《たても》もあって、

土屋銀之助

勾配のついた瓦屋根や、大陸風の柱や、白壁や、

猪子の妻

すべて過去の壮大と衰頹《すいたい》とを語るかのように見える。

島崎藤村

黄ばんだ銀杏《いちじょう》の樹の下に腰を曲《こご》めながら、余念もなく

落葉を掃いて居た寺男に。

土屋銀之助

瀬川君はおりますか。

猪子の妻

と言われて、やがて寺男は箒《ほうき》をそこに打捨てて置いて、素足で

蔵裏の方へ見に行った。

島崎藤村

急に丑松の声がした。

丑松が来る。

瀬川丑松 まあ、あがりたまえ。

土屋銀之助 見ると、二階の窓の障子を開けて、顔を差出して呼ぶのであった。

猪子の妻 銀之助と文平の二人は丑松に導かれて暗い梯子段をあがって行った。

土屋銀之助 秋の日は銀杏の葉を通して、部屋に射しこんでいたので、変色した壁紙、掛けてある軸、床の間に並べた書物《ほん》と雑誌の類《たぐい》まで、すべて黄色に反射して見える。

島崎藤村 机の上には例の『懺悔録』、

猪子の妻 読伏せて置いた本に気がついて、丑松は片隅へ押隠すようにして、白い毛布を座蒲団がわりに出して薦《すす》めた。

土屋銀之助 よく君は引越して歩く人さ。一度、引越す癖が着くと、何度でも引越したくなるものと見える。部屋は、先の下宿の方がよさそうぢゃないか。なぜ御引越になったんですか。

島崎藤村 と文平も尋ねて見る。

瀬川丑松 どうもあそこの家《うち》は喧《やかま》しくって、寺の方が静は静だ。

土屋銀之助 何だそうだねえ、先の下宿では穢多が追い出されたそうだねえ。

猪子の妻 そうそう、そういう話ですなあ。

土屋銀之助 だから、そんなつまらん事にでも、あの下宿が嫌になったんぢゃないかと。

瀬川丑松 どうして？

土屋銀之助 こないだ、ある雑誌を読んだところが、精神病患者のことが書いてあった。ある人がその男の住居《すまい》の側《わき》に猫を捨てた。さあ、その猫の捨ててあったのが気になって、妻君にも相談しないで、その日の中にぶいと他へ引越した。こういう病的な頭の人になると、捨てられた猫を見たのが引越しの動機になるなどは珍しくもない、という話があったのさ。は、は、は。僕は瀬川君を精神病患者だと言う訳では無いよ。しかし君の様子を見るのに、どこか体の具合でも悪いようだ。

瀬川丑松 馬鹿なことを言いたまえ。

土屋銀之助 いや、戯言《じょうだん》ぢゃない。実際、君の顔色はよくない。

診《み》て貰ってはどうかね。

瀬川丑松 僕は君、そんな病人ぢゃないよ。

土屋銀之助 しかし。君の身体は変調を来して居るに相違ない。夜寝られないなんて言うところを見ても、どうしても生理的に異常がある。まあ僕は、そう見た。

瀬川丑松 そうかねえ、そう見えるかねえ。

土屋銀之助 見えるともサ。妄想《もうそう》、妄想。今の患者の眼に映った猫も、

君の眼に映た新平民も、みんな衰弱した神経の見せる幻さ。穢多が追い出されたって何だ。当然《あたりまえ》じゃないか。

瀬川丑松

だから土屋君は困るよ。いつでも君は早呑込だ。自分で決めてしまうと、もう他の事は耳に入らないんだから。

猪子の妻

少しそういう所も有ますなあ。

土屋銀之助

引っ越し方が唐突だからさ。しかし、寺の方が勉強は出来るだろう。

瀬川丑松

まえから僕は寺の生活というものに興味を持っていた。

島崎藤村

と丑松は言出した。丁度、下女の袈裟治《けさぢ》が湯沸《ゆわかし》を持って入って来た。信州人ほど茶を嗜《たしな》む手合も少なからう。

こういう飲み物を好むのは寒い山国に住む人々の特色で、日に四五回づつ集って飲むことを楽しみにする家族が多いのである。

丑松も矢張《やはり》茶好の仲間には泄《も》れなかった。茶器を引寄せ、無造作に入れて、濃く熱いやつを二人の客にも勧め、自分も茶碗を

口唇《くちびる》に押宛《おしあ》てながら、香《こう》ばしく

焙《あぶ》られた茶の葉のにおいを嗅いで見ると、急に気分が清々する。

瀬川丑松

まあ蘇生《いさかへ》ったような心地《こころもち》になる。

島崎藤村

やがて丑松は茶碗を下に置いて、寺住の新しい経験を語り始めた。

瀬川丑松

昨日の夕方、僕はこの寺の風呂に入って見た。一日働いて疲れているところだったから、入った心地《こころもち》は格別さ。明窓《あかりまど》の

障子を開けると紫苑《しおん》の花なぞが咲いてるじゃないか。風呂に入りながらキリギリスを聴くなんて、寺らしい趣味だと思ったねえ。今までの

下宿とはまるで様子が違う。僕は自分の家《うち》へでも帰ったような心地

《こころもち》がしたよ。

土屋銀之助

そうさなあ、普通の下宿ほど無趣味なものはないからなあ。

瀬川丑松

それから君、色々なことがある。第一、鼠の多いには僕も驚いた。

猪子の妻

鼠？

瀬川丑松

昨夜《ゆうべ》は僕の枕頭《まくらもと》にも来た。なれなければ、気味が悪いじゃないか。今朝その話をしたら、奥様の言草が面白い。猫を飼って

鼠を捕らせるよりか、自然に任せて養ってやるのが慈悲だ。なあに、

食物さえ宛行《あてが》ってやれば、そんなに悪戯《いたづら》する動物

じゃない。うちの鼠は温順《おとな》しいから御覧なさいツて。成程

そう言われて見ると、少しも人を恐れない。白昼《ひるま》ですら出て

遊んでいる。寺の内《なか》の光景《けしき》は違ったものだと思ったよ。

土屋銀之助

そいつは妙だ。余程奥様という人は変った婦人《おんな》と見えるね。

瀬川丑松

なに、それほど変っても居ないが、普通の人よりは宗教的などころがあるさ。

土屋銀之助

外にはどんな人がいるのかい。

瀬川丑松 子坊主が一人。下女。それに庄太といふ寺男。ホラ、君等の入って来た時、庭を掃いて居た男があったろう。あれがそうだね。誰も彼男《あのおとこ》を庄太と言うものはない。みんな「庄馬鹿」と言ってる。日に五度《ごたび》ずつ、払暁《あけがた》、朝八時、十二時、入相《いりあい》、夜の十時、これだけの鐘を撞《つ》くのがあの男の勤務《つとめ》なんだそうだ。それから、あの、なには。住職は。

瀬川丑松 住職は今、留守さ。

島崎藤村 こう丑松は見たり聞いたりしたことを取交ぜて話したのであった。

終《しまい》に、敬之進の娘で、この寺に貰われて来ているという、お志保の話も出た。

猪子の妻 へえ、風間さんの娘なんですか。こないだ一度校友会に出て来た、

あの人でしょう？

瀬川丑松 そう。僕たちの来る前の年に卒業した人です。土屋君、そうだったねえ。

土屋銀之助 たしかそうだ。

島崎藤村 この日蓮華寺の台所では、先住の命日と言って、精進物《しょうじんもの》を作るので多忙《いそが》しかった。

藤村、去る。

猪子の妻 月々の持斎《ぢさい》には経を上げ膳を出す習慣《ならわし》であるが、

この日は好物の栗飯を炊いて、仏にも供え、下宿人にも振舞いたいと言う。

瀬川丑松 用意の調《ととの》った頃、奥様は台所を他《ひと》に任せて置いて、

猪子の妻 丑松の部屋へ上って来た。丑松も、銀之助も、文平も、この話好きな

奥様の目には、三人の子のように映ったのである。

土屋銀之助 時々 宗教《おしえ》の話なども持ち出した。

瀬川丑松 奥様はまた十二月二十七日の御週忌の光景《ありさま》を語り聞かせた。

奥様が来る。

奥様 この冬の日には仏の前に集って、記念の一夜を送るといふ昔からの習慣を語り聞かせ。説教もあり、読経もあり、

瀬川丑松 御伝抄《おでんしょう》の朗読もあり、十二時には男女一同御夜食の膳に就くなど、その御通夜の儀式のさまざまを語り聞かせた。

奥様 なむあみだぶ。

猪子の妻 と奥様は独語のように繰返して、やがて敬之進の退職のことを尋ねる。

土屋銀之助 奥様に言わせると、今の住職が敬之進の為に尽したことは一通りで無い。

瀬川丑松 あのを酒を断つたらばとは、よく住職の言うことで、禁酒の証文を入れるまで

に敬之進が後悔する時はあっても、また元に戻ってしまう。飲めば困る

ということとは知りつつ、どうしても持った病には勝てないらしい。

猪子の妻 それで敷居が高くなって、今では寺にも来られないような仕末。

土屋銀之助 あの父親の為には、どんなにかお志保も泣いている、とのことであった。

奥様 そうですか。いよいよ退職になりましたか。

瀬川丑松 道理で。私がこちらへ引越して来る時、風間さんは門までついて来ました。

なぜ門の前まで一緒に来たか、それは今、説明しようと思はない、

そう言つて、ふいど行つてしまいました。随分酔っていましたツケ。

奥様 へえ、うちの前まで？酔つていても娘のことは忘れないでしょうねえ。

まあ、それが親子の情ですから。

瀬川丑松 夕飯は例になく蔵裏《くり》の下座敷であった。

土屋銀之助 宵の勤行《おつとめ》も済んだと見えて、給仕は白い着物を着た子坊主が

してくれた。五分心《ごぶしん》の灯は香の煙に交る夜の空気を照らして、

高い天井の下をおもしろく見せる。古壁に懸けてある法衣《ころも》は

住職の着るものであろう。

猪子の妻 変つた室内の様子は三人の注意を引いた。わけても銀之助は、よく笑つて、

その高い声が台所までも響くので、奥様は若い人達の話の聞かずにいられ

なかつた。お志保までも来て、奥様に寄り添いながら聞いた。

土屋銀之助 急に文平は快活になる。婦人の居る席では熱心になるのがこの男の性分で、

瀬川丑松 二階に三人で話した時から見ると、ここへ来てからは声の調子が違った。

土屋銀之助 愛嬌《あいきょう》のある上に、すずしい艶のある瞳を輝かせ、よもやまの

話を始めた時は、確に面白い人だと思わせた。

奥様 文平はまた、時々お志保の方を注意して見た。

猪子の妻 お志保は着物の前を搔合せたり、垂れ下る髪の毛を撫付けたりして、

瀬川丑松 人々の物語に耳を傾けて居たのである。

猪子の妻 銀之助はそんなことに頓着なしで、やがて思い出したように、

土屋銀之助 たしかわたしどもの来る前の年でしたなあ、貴方の卒業は。

奥様 こう言つてお志保の顔を眺めた。

お志保が来る。

お志保 はあ。

土屋銀之助 卒業生の写真が学校に有ますがね、あのころから見ると、みんな立派な

姉さんに成りましたなあ。わたしどもが来た時分には、まだ鼻涙《はな》を

垂らしてゐるような連中もあつたツケが。

奥様

楽しい笑声は座敷の内に溢《あふ》れた。お志保は紅《あか》くなくなった。こういう間にも、独り丑松は洋燈《ランプ》の火影《ほかげ》に横になって、何か深く物を考えて居たのである。

土屋銀之助

ねえ、奥様。瀬川君は非常に沈んでいますねえ。

奥様

さようさ。

土屋銀之助

君がこのお寺へ部屋を捜しに来た日だ。ホラ、僕が散歩していると、本町で君に遭遇《でつくわ》したろう。あの時、君の考え込んでいる様子と言ったら。しばらく君の後姿を見送って、何とも言い様の無い心地

《こころもち》がしたねえ。君は猪子先生の「懺悔録」を持っていた。

ああ、またあの先生の書いたものなぞを読んで、神経を痛めなければいいがなあ。ああいう本を読むのは、君、よくないよ。

瀬川丑松

何故？

土屋銀之助

だって、君、あまり感化を受けるのはよくないからサ。

瀬川丑松

感化を受けたってもよいぢゃないか。

土屋銀之助

そりゃあよい感化ならいいけれども、悪い感化だから困る。見たまえ、君が変わったのは、あの先生のもを読み出してからだ。猪子先生は

穢多だから、ああいう風に考えるのも無理は無い。普通の人間に生れたものが、なにもあの真似をしなくてもよかろう、極端に悲しまなくてもよかろう。

瀬川丑松

貧民とか労働者に同情を寄せるのはいかんと言うのかね。

土屋銀之助

そういう訳ではないよ。僕だって、美しい思想だとは思うさ。しかし、君のように、そう考え込んでしまっても困る。なぜ君はああいうものばかり読むのかね、なぜ君は沈んでばかりいるのかね。一体、君は何を考えているのかね。

瀬川丑松

僕かい？別にそう深く考えてもいないさ。

土屋銀之助

でも何かあるだろう。

瀬川丑松

何かとは？

土屋銀之助

何か原因がなければ、そんなに変る筈がない。

瀬川丑松

僕は変ったかねえ。

土屋銀之助

変ったとも。まるで師範校時代の瀬川君とは違う。あの時分は君、ずっと快活な人だったね。もう少し他の方面へ心を向けるとか、何とかして、自分の性質を伸ばすようにしたら、どうかね。こないだから僕は言おうと思っていた。実際、君の為に心配しているんだ。身の具合でも悪いなら、早く医者に診せて、自分で自分を救うようにするが、いいぢゃないか。

お志保

しばらく座敷の中は寂《しん》として話声が絶えた。丑松は何か思い出したことがあると見え、急に喪心した人のやうに成って、茫然として居たが、やがて気が付いて我に帰った頃は、顔色がすこし蒼ざめて見えた。

土屋銀之助 どうしたい、君は。はてはては、妙に黙ってしまったねえ。

瀬川丑松 はてはては。はてはては。

奥様 と丑松は笑い紛《まぎらわ》してしまった。銀之助も一緒になって笑った。

猪子の妻 土屋君は「懺悔録」を御読みでしたか。

お志保 と文平は談話《はなし》を引取った。

土屋銀之助 いいえ、まだ読んで見ません。

猪子の妻 何か猪子という先生の書いたものを御覧でしたか。私は未だなんにも

読んで見ないんですが。

土屋銀之助 そうですなあ、僕の読んだのは「労働」というものと、それから

「現代の思潮と下層社会」あれを瀬川君から借りて見ました。なかなかよいところが有ますよ、力のある深刻な筆で。

猪子の妻 一体 あの先生はどこを出た人なんですか。

土屋銀之助 たしか高等師範でしたらう。

猪子の妻 こういう話を聞いたことが有ましたツけ。あの先生が長野に居た時分、

郷里の方でも兎に角、ああいう人を穢多の中から出したのは名誉だと言つて、講習に頼んださうです。そこで彼が先生が出掛けて行った。すると宿屋で断られて、泊る所が無かつたとか。そんなことが面白くなって長野を去るようになって、なんて。まあ、師範校を辞めてから、あの先生も勉強したんでしょう。妙な人物が新平民から飛出したものですね。

土屋銀之助 僕もそれは不思議に思っている。

猪子の妻 あんな下等人種の中から、兎に角、思想界へ頭を出したなんて、どうしても私にはその理由が解らない。

土屋銀之助 しかし、あの先生は肺病だと言うから、あるいはその病気の為に、あそこまでいったものかも知れません。

猪子の妻 へえ、肺病ですか。

土屋銀之助 実際病人は真面目ですからなあ。「死」という奴を眼前《めのまえ》に置いて、平素《しよっちゆう》考えているんですからなあ。あの先生の書いたものを見て、何となくこう人に迫るようなところがある。あれが肺病患者の特色です。

猪子の妻 はてはては、土屋君の観察はどこまでも生理的だ。

土屋銀之助 いや、そう笑つたものでも無い。見たまえ、病気は一種の哲学者だから。

猪子の妻 して見ると、穢多がああいうものを書くんぢやない、病気が書かせるんだ。こう成りますね。

土屋銀之助 だって、君、そう悟るより外に考え様はないぢやないか。

新平民が美しい思想を持つとは思われないぢやないか。はてはては。

お志保 こういう話を銀之助と文平としている間、丑松は黙って、洋燈《ランプ》

の火を熟視《みつ》めていた。自然《おのづ》と外部《そと》に表れる苦悶の情は、頬の色の若々しさに交って、一層その男らしい容貌《おもげせ》を沈鬱《ちんうつ》にして見せたのである。

猪子の妻 茶が出てから、三人は別の話しに移った。

瀬川丑松 奥様は旅先の住職の噂などを始めて、客の心を慰める。

奥様 子坊主は隣の部屋の柱に凭《もた》れて、独りで舟を漕いでいた。

お志保 台所の庭の方から、遠く寂しく地響きのように聞えるは、

土屋銀之助 庄馬鹿が米をつく音であろう。夜も更《ふ》けた。

銀之助、去る。

猪子の妻 友達が帰った後、丑松は心の激昂を制《おさ》えきれないという風で、

瀬川丑松 自分の部屋の内を歩いて見た。

奥様 其日の物語、

お志保 あの二人の言った言葉、

猪子の妻 あの二人の顔に表れた微細な感情まで思い出して見ると、

瀬川丑松 何となく胸肉《むなじし》の戦慄《ふる》えるような心地がする。

お志保 先輩の侮辱された、ということとは、口惜《くや》しかった。

瀬川丑松 賤民だから取るに足らん。こういう無法な言草は、ただ考えて見たばかりでも、腹立たしい。ああ、種族の相違という屏擋《わたかまり》の前には、

いかなる熱い涙も、いかなる至情の言葉も、いかなる鉄槌《てっつい》のような猛烈な思想も、それを動かす力は無いのであろう。

奥様 多くの善良な新平民はこうして世に知られずに葬り去らるのである。

猪子の妻 この思想に刺激されて、寢床に入ってから丑松は眠らなかつた。

瀬川丑松 目を開いて、頭を枕につけて、自分の一生を考えた。鼠がまた現れた。

お志保 畳の上を通る足音に妨げられては、夢を結ばない。

瀬川丑松 一旦吹消したランプを細目に点けて、枕頭《まくらもと》を見た。暗い部屋の隅に影のように動く小さな動物の敏捷《はしこ》さ、人を人とも思はず、長い尻尾を振りながら、出入する有様は、憎らしくもあり、おかしくもあり、き、き。

奥様

瀬川丑松 と鳴く声は古い壁に秋の夜の寂しさを添えるのであつた。

お志保 それからそれへと丑松は考えた。

瀬川丑松 一つとして不安に思われないものはなかつた。深く注意した積りの自分の行為《おこない》が、疑われるようなことに成ろうとは。まあ、考えれば考えるほど用意が無さ過ぎた。なぜ、あの大日向が鷹匠町の宿から追放された時に、自分は静止《じつ》としていなかつたらう。

なぜ、あんなに泡を食って、この蓮華寺へ引越して来たのだろうか。

猪子の妻 何故、猪子蓮太郎の本が出る度に、自分は誇り顔に吹聴したのだろうか。

瀬川丑松 何故、先輩の弁護をして、何か先輩と自分との間には一種の関係でもあるように他《ひと》に思わせたのだろうか。

奥様 何故、先輩の名前を、他《ひと》の前で口に出したのだろうか。

瀬川丑松 何故、内証で先輩の書いたものを買わなかったのだろうか。

お志保 何故、独りで部屋に隠れて、読みたい時に密《そつ》と出して読むという知恵が出なかったのだろうか。

瀬川丑松 一夜はこういう風に、褥《しとね》の上で慄《ふる》えたり、煩悶

《はんもん》したりして、暗いところを彷徨《さまよ》ったのである。

お志保 翌日になって、いよいよ丑松は深く意《こころ》を配るようになって。

瀬川丑松 過ぎ去った事は、もう仕方がないとして、これから先を用心しよう。

蓮太郎の名。人物。著書。一切、先輩に閑したことは決して口に出すまい。

猪子の妻 こう用心するようになった。

奥様 さあ、父の与えた戒めは身に染々《しみじみ》と徹《こた》えて来る。

瀬川丑松 決して、それとは告白《うちあ》けるな。

猪子の妻 とは堅く父も言い聞かせた。

奥様 これから世に出て身を立てようとするものが、

瀬川丑松 誰が好んで告白《うちあ》けるような真似をしよう。

猪子の妻 丑松も二十四だ。

瀬川丑松 思えばよい年齢《とし》だ。ああ。いつまでもこうして生きたい。

お志保 と願えば願うほど、余計に穢多としての切ない自覚が湧き上るのである。

猪子の妻 たとえ、いかなる場合であろうと、

瀬川丑松 大切な戒めばかりは破るまいと考えた。

二幕五場

猪子の妻が来る。

猪子の妻 郊外は収穫《とりいれ》の為に忙《せわ》しい時節であった。農夫の群は
いづれも小屋を出て、午後の労働に従事していた。田《た》の面《も》の稲
は、もうすっかり刈り乾して、すでに麦さえ蒔付《まきつ》けたところも
あった。一年《ひととせ》の骨折の報酬《むくい》を収めるのは今である。
雪の来ない内に早く。こうして千曲川の下流に添う一面の平野は、
宛然《あだかも》、戦場の光景《ありさま》であった。

藤村が来る。

島崎藤村 その日、丑松は学校から帰るとすぐに蓮華寺を出て、どこへ行くという目的
もなしに歩いた。新町の町はずれから、桑島の間を通って、この郊外の一角
へ出たのである。積上げた『藁《わら》』の片隅で霜枯れた雑草の上に
足を投出し、肺の底まで深く野の空気を吸入した時は、生き返ったような
心地《こころもち》になった。

猪子の妻 見れば男女の農夫。そこに親子、ここに夫婦、粃《もみ》を打つ槌《つち》
の音は地に響いて、稲扱《いねこ》く音に交って勇ましく聞える。立ちのぼ
る白い煙。雀の群は時々空に舞揚がって、やがてまたぼつと散り乱れる。
島崎藤村 秋の日は烈しく照りつけて、男は頬冠《ほつかぶ》り、女は編笠《あみがさ》
であった。めずらしく風の無い日で、汗は人々の体を流れたのである。
野に満ちた光を通して、丑松はこの労働の光景を眺めて居ると、
よりかかった『藁によ』の側《わき》を一人の少年が通る。

蓮太郎が来る。

猪子の妻 日に焼けた額と、柔嫩《やわらか》な目付とで、敬之進の悴《せがれ》
と知れた。省吾《しょうご》というのがこの少年の名で、丑松が受持の
高等四年の生徒なのである。

丑松が来る。

瀬川丑松 風間さん、どちらへ？
猪子蓮太郎 あの、母さんが沖《野外》に居やすから。

瀬川丑松 母さん？

猪子蓮太郎 あそこに。先生、あれがうちの母さんでござす。

猪子の妻 と省吾は指差して、すこし顔を紅《あか》くした。同僚の細君の噂、それを丑松も聞かないでは無かったが、眼前《めのまえ》に働いて居る女がその人とは、すこしも知らなかった。古びた上被《うはっぱり》、茶色の帯、盲目縞《めくらじま》の手甲《てっこう》、

島崎藤村 編笠に日を避《よ》けて、身体を前後に動かしながら、踏々《せつせ》と稲の穂を扱落《こきおと》して居る。信州北部の女はいずれも強い気象のものばかり。よく働くことに掛けては男子にも勝る程であるが、教員の細君で野面《のら》に出て、烈しい気候を相手に精出すものも少ない。

猪子の妻 これも境遇からであろう、

島崎藤村 と憐れんで見て居るうちに、

猪子の妻 省吾はまた指差して、彼の槌を振上げて舂《もみ》を打つ男、彼《あれ》は手伝いに来た旧《むかし》からの出入のもので、音作という百姓であると話した。母と彼男《あのおとこ》との間に、箕《み》を高く頭の上に載せ、少しずつ舂を振り落して居る女、あれは音作の女房であると話した。その女房が箕を振る度に、空殻《しいな》の塵《ほこり》が舞揚って、人々は黄色い灰を浴びるように見えた。省吾はまた、母の傍《わき》に居る小娘を指差して、異母《はらちがい》の妹のお作であると話した。

瀬川丑松 君の兄弟は何人いるのかね。

猪子蓮太郎 七人。

瀬川丑松 随分だねえ、七人とは。君に、姉さんに、進さんに、あの妹に、それから？

猪子蓮太郎 まだ下に妹が一人と弟が一人。一番うえの兄さんは兵隊で死にやした。

瀬川丑松 むむ、そうですか。

猪子蓮太郎 その中で、死んだ兄さんと、蓮華寺へ貰われて行きやした姉さんと、わしと。これだけ母さんが違いやす。

瀬川丑松 そんなら、君やお志保さんの本当の母さんは？

猪子蓮太郎 もういやせん。

島崎藤村 こういう話をして居ると、継母《ままはは》の呼声が聞こえてきた。

猪子の妻 省吾や。おめえは、まあ、いくつに成ったら御手伝いする積りだよ。

瀬川丑松 省吾は継母を恐れるという様子で、おずおずと継母の前に立つ。

猪子の妻 考えて見な、もう十五ぢゃねえか。今日は音さんまで御頼申《おたのもう》して、塵埃《ほこり》だらけになって働《かま》けて居るのに、母さんが

言わねえだつて、御手伝いするのが当然《あたりまえ》だ。高等四年にも成つて、まだ虫蝨捕《いなごと》りに夢中になつてゐるなんて、そんなものが、どこにある。与太坊主め。

瀬川丑松 見れば細君は稲扱《いねこ》く手を休めた。音作の女房も振返って、
気の毒そうに省吾の顔を眺めながら、前掛をべ直《しめなお》したり、
身体の塵埃《ほこり》を掃ったりして、やがて顔に流れる膏汗《あぶらあせ》
を拭いた。庭《むしろ》の上の糶は山を成して居る。音作もまた長柄に身を
支えて、うんと働いた腰を延ばし、濃く青い空気を呼吸した。
猪子の妻 これ、お作や。どうしてそんな悪戯《いたづら》するんだい。ほんとに、
どいつもこいつも。見ろ、進を。よっぽど御手伝いする。

猪子連太郎 あれ、進だって遊んでいやすよ。

猪子の妻 遊んでるものか。さっきから御子守をしていやす。何ぞと言うと、
すぐに口答えだ。父さんが過多《めた》甘やかすもんだから、母さんの
言うことなぞちつとも聞きやしねえ。だから省吾は嫌いさ。こちらが
遠慮していれば、どこまでいい気になるか知れやしねえ。きつと、
また蓮華寺へ寄って、姉さんに何か言付けて来たんだらう。それで
こんなに遅くなったんだらう。隠れて行って見ろ、酷いぞ。

島崎藤村 奥様。

瀬川丑松 と音作は見兼ねたらしい。

島崎藤村 どうか、まあ、今日のところは、わしに免じて許して下さいように。
なあ、省吾さん、あんたもそれぢやいやせん。母さんの言うことを
聞かねえようなものなら、私だつて提棒《さげぼう》(仲裁)に出るのは
もう御免だから。どれ、始めずか(始めようか)。

瀬川丑松 と音作は省吾を相手にし、槌《つち》を振って糶《もみ》を打ち始めた。
島崎藤村 ふむ、よう。

瀬川丑松 の掛声も起る。細君も、音作の女房も、また仕事に取懸った。

島崎藤村 丑松は敬之進の家族を見たのである。あの可憐な少年も、

瀬川丑松 お志保も、細君の子では無いということが解った。

猪子の妻 細君が苦勞して居るといふことも解った。

暗転

三幕一場

任職が来る。

蓮華寺の住職

川舟は風変りな屋形造りで、舷《ふなべり》から下を白く化粧して赤い二本筋を横に表してある。半分を板戸で仕切って、荷積みのために区別がしてあるので、客の座るところは細長い座敷を見るよう。立てば頭が支える程。人々はいずれも狭苦しい屋形の下に膝を突合せて乗った。

奥様が来る。

奥様

やがて水を撃つ棹《さお》の音がした。舟底は砂の上を滑り始めた。丑松は隅の方に両足を投出して、独り寂しそうに巻煙草を燻《ふか》しながら、深い思に沈んで居た。

蓮華寺の住職

河の面に映る光線の反射は割合に窓の外を明くして、おもしろく見せる。

奥様

これから自分の生涯はどうなる。丑松は自分で自分に尋ねることもあった。窓から首を出して飯山の空を眺めると、重く深く閉塞《とぢふさが》った雪雲の色は孤独な穢多の子の心を傷《いた》ましめる。

丑松が来る。

瀬川丑松

今。学校の連中はどうしているだろう。友達の銀之助はどうしているだろう。あの不幸な、敬之進はどうしているだろう。蓮華寺の奥様は。お志保は、あの寺の古壁を思うと、血の湧くような心地《こころもち》になる。

雲《みぞれ》は雪に変わって来た。舟の中は人々の雑談で持切った。

わけても高柳と一緒にになった坊主、柄に無い政事上の取沙汰《とりざた》、聞く人は皆な笑い憎んだ。この坊主に言わせると、選挙は一種の遊戯で、政事家は皆な俳優に過ぎない、我々は見物して楽めば好いのだと。

この言葉を聞いて、また人々が笑えば弥次馬が飛出す。その尾について鼻顧《ひいき》不鼻顧《ぶひいき》の論が始まる。

蓮華寺の住職

いよいよ市村も切り込んで来るそうだ。

瀬川丑松

と一人が言えば、

奥様

そう言う君こそ御先棒に使われるんじゃないか。

瀬川丑松

と、まぜかえすものがある。弁護士の名は幾度か繰返された。

それを聞く度に、高柳は不快らしい顔つき。ふふむ、と鼻の先で笑って、嘲ったように口唇を引き歪めた。

蓮華寺の住職

こういう他《ひと》の談話《はなし》の間にも、女は高柳の側により添って、耳を澄まして、夫の機嫌を取りながら聞いて居た。見れば、美しい女の数にも入るべき人で、華麗《はなやか》な新婚の風俗は多くの人の目を引いた。髪は丸髻《まるまげ》に結び、桜色の肌理《きめ》細やかにあぶらづいて、愛嬌《あいきょう》のある口元を笑う度に覆いかくす様は、まだ世帯の苦勞を知らない人である。

瀬川丑松

さすが心の表情はどこかに読まれるもので。大きな、ばっちりとした眼のうちには、何となく不安の色も現れて、熟《じつ》と物を凝視《みつ》めるような沈んだところも有った。女は高柳の耳の側へ口を寄せて、何か人に知れないように囁くこともあった。

蓮華寺の住職

どうかすると又、丑松の方を盗むように見て、

奥様

おや、あの人は、何処かで見掛けたような気がする

瀬川丑松

と、こういう眼で言うことも有った。

蓮華寺の住職

同族の憐れみは、この美しい穢多の女を見るにつけても、丑松の胸に浮んだあれ程の容姿《きりょう》を持ち、富有《ゆたか》な家に生れて来たのであるから、無論相当のところ縁付かれる人だ。あんな野心家の餌なぞにならなくてもすむ人だ。可愛そうに。こう考えると同時に、女も自分と同じ秘密を持っているかと思いやると、どうもそこが気懸りでならない。

瀬川丑松

よしんば自分を知っているとしたところで、それがどうした、と丑松は自分で自分に尋ねて見た。根津の人、または姫子沢のもの、と思っているなら自分に取って一向恐れるところはない。恐れるとすれば、それはさきのことだ。自分は、数える程しか故郷へ帰らなかった。卒業した時に一度、それから今度の帰省が足掛三年目。まあ、向町などなるべく通らなかつたし、通ったところで他《ひと》が、そう注意して見る筈もなし、見たところでどこのものか解らない。大丈夫。ああして囁くのは何でも無いのであろう。とはいうものの、何となく不安に思う懸念が絶えず心の底にあった。

蓮華寺の住職

奥様

丑松は高柳夫婦を見ないようにと勉《つと》めた。

蓮華寺の住職

千曲川の瀬に乗って下ること五里。とどこどころの舟場へも漕ぎ寄せ、洪水のある度に流れるという粗造な船橋の下をも潜り抜けなどして、丑松は人々とそこから岸へ上った。見れば雪は河原にも、船橋の上にも在った。小降のなかを暮れて、灰白《ほのじろ》く雪の町々。そこにも、ここにも、ちらちら灯が点く。その時、蓮華寺で撞《つ》く鐘の音が空に響き渡る。

瀬川丑松

ああ、庄馬鹿が撞くのだ。相変らず例の鐘楼に上って冬の一日が暮れたことを報せるのであろう。言うに言はれぬ可懐《なつか》しさが湧上って来る。家々は、もう冬籠《ふゆごもり》の用意、軒丈ほどの高さに毎年作りつける粗末な葦簾《よしず》の雪がこいがすっかり出来上って居た。

新町の通りへ出ると、一筋暗く踏みつけた町中の雪道を往ったり来たり。いづれも、この夕暮を急ぐ人々ばかり。

奥様 丑松は右へ避け、左へ避けして、愛宕《あたご》町をさして急いで行こうとすると、途中で一人の少年に出逢った。

瀬川丑松 近いて見ると、それは省吾で、酒の罍《びん》を提げて、寒そうに震えながらやって来た。

蓮太郎が来る。

猪子蓮太郎 あれ、瀬川先生。まあ、たまげた。

瀬川丑松 君は、お使かね。

猪子蓮太郎 はあ。

瀬川丑松 と、黒ずんだ色の罍を出して見せる。父の為に酒を買って帰って行くところであった。それから敬之進のことを尋ねて見た。

猪子蓮太郎 父さん？あの。父さんは家に居りやすよ。

瀬川丑松 家へ帰ったらねえ、父さんによろしく言って下さい。

蓮華寺の住職 省吾は御辞儀して、ぶいと駈出して行った。

瀬川丑松 私も雪の中を急いだ。

住職と丑松、去る。

猪子蓮太郎 御頼申《おたのもう》します。

奥様 蓮華寺の葦裏《くり》へ来て、こう言い入れた一人の紳士がある。階下

《した》では、もうとつくに朝飯を済ましたのに、まだ丑松は二階から顔を洗いに下りて来なかった。

猪子蓮太郎 御頼申します。

奥様 と、また呼ぶので、下女の袈裟治はそれを聞きつけて、あわてて台処の方から飛んで出て来た。

猪子蓮太郎 一寸伺いますが、瀬川さんの御宿は是方様《こちらさま》でしょうか
小学校へ御出《おで》なさる瀬川さんの御宿は。

奥様 そうでやすよ。

猪子蓮太郎 何ですか、御在宿《おいで》で御座《ござい》ますか。

奥様 はあ、居なさりやす。

猪子蓮太郎 では、是非御目に懸りたいことが有まして、こういふものが伺いましたと、どうか、そう仰って下さい。

奥様 と言って、紳士は下女に名刺を渡す。

蓮太郎、名刺を奥様に渡す。

奥様 御待ちなすって

猪子蓮太郎 二階の部屋へと急いだ。

奥様 丑松は、まだ寢床を離れなかった。袈裟治が枕頭《まくらもと》へ来て呼び起こした時は、客の有るということを半分夢の中で聞いて、苦しそうに呻吟《うな》ったり、手を延ばしたりした。やがて寢惚眼《ねぼけまなこ》を擦りながら名刺を眺めると、むっくり跳ね起きた。

丑松が来る。

瀬川丑松 どうしたの、この人が。

奥様 あんたを尋ねて来なさりやしたよ。

猪子蓮太郎 しばらくの間、丑松は夢のように、手に持った名刺と下女の顔とを見比べて。

瀬川丑松 この人は僕のところへ来たんじゃないんだろう。

奥様 と不審を打って小首を傾《かし》げる。

瀬川丑松 高柳利三郎？何か間違っちゃいないか。どうも、こんな人が僕のところへ尋ねて来る筈がない。

奥様 瀬川さんと言って来なすったもの。小学校へ御出なさる瀬川さんと言って。

瀬川丑松 妙なことが有ればあるもんだなあ。高柳、高柳利三郎。この男が僕の

ところに。何の用があつて来たんだろう。兎も角も逢つて見るか。

それじゃあ、御上りなさいって、そう言つて下さい。

奥様 それはそうと、御飯はどうしやしよう。

瀬川丑松 御飯？

奥様 あれ、あんたは起きなすったばかりぢやござせんか。階下《した》で食べなすったら？ 御味噌汁《おみおつけ》も温めてありやすにサ。

瀬川丑松 よそう。今朝は食べたくない。それよりは客を下の座敷へ通して待たして置いて下さい。今、部屋を片付けるから。

猪子蓮太郎 袈裟治は下りて行つた。丑松は部屋の内を眺め廻した。着物を着更えるやら、寢道具を片付けるやら。そこいらに散乱《ちらか》つたものは皆な押入へ。床の間に置並べた本の中には、蓮太郎のものも有る。机の下へ押込んで見たが、また取出して、押入の暗い隅の方へ隠蔽《かく》すようにした。今はこの部屋の内にあの先輩の書いたものは一冊も出て居ない。

瀬川丑松 こう考えて、すこし安心して、さて顔を洗うつもりで、急いで梯子段

《はしごだん》を下りた。それにしても何の用事があつて、あんな男が尋ね

て来たろう。わざわざやって来るとは、丑松は客を自分の部屋へ通す前から、疑心《うたがひ》と恐怖《おそれ》とで震えたのである。

猪子蓮太郎 始めまして、私は高柳利三郎です。かねて御名前は承って居りましたが、まだ御尋《おたず》ねするような機会もなかったものですから。

瀬川丑松 よく御入来《おいで》下さいました。さあ、どうかまあこちらへ。

奥様 こういう挨拶を蔵裏の下座敷で取交して、やがて丑松は二階の部屋の方へ客を導いて行った。

瀬川丑松 突然なこの来客の底意の程も図りかね、相對《さしむかい》に座る前から、もう何となく氣不味《きまづ》かった。

奥様 丑松はすこしも油断することが出来なかった。とは言うものの、何気ない様子を装《つくろ》って、自分は座蒲団を敷いて座り、客には白い毛布を四つ畳みにして薦《すす》めた。

瀬川丑松 まあ、御敷下さい。どうも失礼しました。実は昨晚遅かったものですから、寝過してしまいました。

猪子蓮太郎 いや、私こそ、御疲労《おつかれ》のところへ。昨日《さくじつ》は舟の中で御一緒に成ました時に、何とか御挨拶を申し上げようか、申し上げなければ濟まないが、こう存じましたのですが、あんなところで御挨拶しますのも失礼と存じまして。御見懸け申しながら、つい御無礼を。

奥様 取引でもするような風に、高柳は膝を進めて、

猪子蓮太郎 承りますれば御不幸が御有なすったそうですな。さぞ御力落しでいらっしやいましょう。

瀬川丑松 はい。飛んだ災難にあいまして、阿爺《おやぢ》も亡くなりました。

猪子蓮太郎 それはどうも御氣の毒なことを。むむ、そうそう、こないだも貴方と豊野のステーションで御一緒に成って、それから私が下りると、貴方も御下りなさる、して見ると、貴方と私とは、往きも、還りも御一緒。はゝゝゝ。何かこう因縁《いんねん》づくとも、まあ、申して見たいぢや有ませんか。

奥様 丑松は答えなかった。

猪子蓮太郎 そこです。御縁が有ると思えばこそ、こうして御話も申上げるのですが、貴方の御心情に就きまして、御察し申して居ることも有ますし。

瀬川丑松 え？

猪子蓮太郎 又、私の方から言いまして、少しは察して頂きたいと思ひまして、それで御邪魔に出ましたような訳なんです。

瀬川丑松 どうも貴方の仰《おっしゃ》ることはよく解りません。

猪子蓮太郎 まあ、聞いて下さい。

瀬川丑松 ですけど、どうも貴方の御話の意味が汲取れないんですから。

猪子蓮太郎 そこを察して頂きたいと言うのです。御聞及びでも御座いますし、私が、私も

世話して呉れるものが有まして、家内を迎えました。まあ、世の中には妙なことが有るもので、あの家内のが貴方を御知り申して居るのです。

瀬川丑松 は、ト、ト、ト、奥さんが私を御存じなんですか。それがどうしました。

猪子蓮太郎 ですから私も御話に出ましたような訳なんです。

瀬川丑松 と仰ると？

猪子蓮太郎 まあ、家内なぞの言うことですから、何が何だか解りませんけれど。

しかし、不思議なことには、あいつのうちの遠い親類に当るものとかが、貴方の阿爺《おとつ》さんと昔御懇意であったとか。

奥様 こう言つて、高柳は熱心に丑松の様子を窺《うかが》うようにして見て、

猪子蓮太郎 いや、そんなことは、まあどうでもいいと致しまして、家内が貴方を御知り

申して居ると言いましたら、貴方だっても御聞流しには出来ませぬ、私も私で、どうも不安心に思うことが有るものですから。

奥様 しばらく部屋の内には声が無かった。二人は互いに探りを入れるような

目付して、無言のままに相対して居たのである。

猪子蓮太郎 ああ。こんな御話を申上げに参るといふのは、よくよくだと思つて頂きたいのです。貴方より外に私ども夫婦のことを知つて居るものはなし、又、

私たち夫婦より外に貴方のことを知つて居るものは有ませぬ——ですから、そこは御互い様に——まあ、瀬川さんそうぢや有ませぬか。御承知の通り、選挙も近いまいりました。貴方に助けて頂かなければならない。もし私の言うことを聞いて下さらないとすれば、私は今、ここで貴方と刺しちがえて死にます。は、ト、ト、ト、まさか貴方の命を頂くとも申しませぬがね、まあ、私はそれくらいに決心で参つたのです。

奥様 その時、樓梯《はしごだん》を上つて来る人の足音がしたので、急に高柳は口をつぐんでしまった。『瀬川先生、御客様《おきやくさん》でやすよ。』と呼ぶ袈裟治の声を聞きつけて、ついと丑松は座を離れた。唐紙を開けると、もうそこに友達が微笑みながら立つて居たのである。

銀之助が来る。

瀬川丑松 おお、土屋君か。

奥様 と思わず丑松は溜息を吐いた。銀之助は一寸高柳に会釈《えしゃく》して、別にそう気に留めるでもなく、何か用事でも有るのだろうかに、早合点から独り定めに定めて、

土屋銀之助 君の好きな猪子先生。ホラ、あの先生が信州へ来てるそうだねえ。

昨日僕は新聞で読んだ。

瀬川丑松 新聞で？

土屋銀之助 ああ、信毎に出て居た。肺病だというけれど、元気な人だねえ。

奥様 と蓮太郎の噂が出たので、急に高柳は鋭い視線を銀之助の方へ注いだ。

土屋銀之助 穢多もなかなか馬鹿にならないよ。まあ、思想《かんがえ》から言えば、多少病的かも知れないが、しかし進んで戦う、あの勇氣には感服する。一体、肺病患者というものは、ああいうものか知らん。あの先生の演説を聞くと、非常に打たれるそうさ。まあ、瀬川君などは聞かない方がいいよ。

聞けばまた病気が発《おこ》るに決まってるから。

瀬川丑松 馬鹿言いたまえ。

土屋銀之助 あはははは。

奥様 と銀之助は反返《そりかへ》って笑った。遽然《にわか》に丑松は黙って

しまった。身体中の機関《どうぐ》が動作《はたらき》を止めて、こうして生きて居ることすら忘れたかのようにであった。

土屋銀之助 どうしたんだろう、また瀬川君は相変らず身体具合でも悪いのかしら。

奥様 と、こう銀之助は自分で自分に言ってみて見た。ややしばらく三人は無言の儘で相対して居た。

土屋銀之助 今日は僕はこれで失敬する。

瀬川丑松 まあ、いいぢやないか。

土屋銀之助 いや、また来る。

瀬川丑松 銀之助は出て行ってしまった。

銀之助、去る。

猪子蓮太郎 只今《ただいま》猪子という方の御話が出ましたが、

奥様 と高柳は巻煙草の灰を落しながら言った。

猪子蓮太郎 何ですか、瀬川さんは、御懇意でいらっしゃるんですか。

瀬川丑松 いいえ。別に、懇意でも有ません。

猪子蓮太郎 では、何か御関係が御有なさるんですか。

瀬川丑松 何も関係は有ません。

猪子蓮太郎 そうですか

瀬川丑松 だって関係のありようが無いぢやありませんか、懇意でも何でも無い人に。

猪子蓮太郎 そう仰れば、まあ、そんなものですけど。ははは。あの方は市村君と御一緒のようですから、どういう御縁故か、伺って見たいと思ひまして

瀬川丑松 知りません、私は。

猪子蓮太郎 市村という弁護士も、あれでなかなか食えない男なんです。

あんな立派なことを言っています、つまり猪子という人を抱きこんで、道具に使用《つか》うという腹に相違ないんです。彼の男が高尚らし

いようなことを言うかと思うと、私は噴飯《ふきだ》したくなる。

そりゃあもう、政事屋なんてものは皆な穢《きたな》い商売人ですからな。どうしても貴方に助けて頂かなければならない。それには先づ貴方に御縫《おすが》り申して、家内のことを世間の人に御話下さらないように。そのかわり、私もまた、貴方のことを。それ、そこは御相談で、御互様に言わないというようなことに。どうか、まあ、私を救うと思召《おぼしめ》して。瀬川さん、これは私が一生の御願いです。

奥様
急に高柳は白い毛布を離れて、畳の上へ手を突いた。哀憐《あわれみ》をもとめる犬のように。丑松はすこし蒼《あおざ》めて、

瀬川丑松
どうも、そう貴方のように、独りで物をきめてしまつては

猪子蓮太郎
いや、私を助けるとおぼし召して。

瀬川丑松
まあ、私の言うことも聞いて下さい。どうも貴方の御話は私に合点《がてん》が行きません。だって、そうぢや有ますまいか。なにも貴方等《あなたがた》のことを私が世間の人に話す必要も無いぢや有ませんか。

猪子蓮太郎
でも御座いましょうが

瀬川丑松
いえ、それでは困ります。何も私は貴方等を御助け申すようなことは無し、

猪子蓮太郎
私はまた、貴方等から助けて頂くようなことも無いのですから。つまり、そんならどうして下さるといふ御考えなんですか。

瀬川丑松
どうするもこうするも無いぢや有ませんか。貴方と私とは全くは、ハ、ハ、ハ、御話はそれだけです。

猪子蓮太郎
無関係と仰ると？

瀬川丑松
だって、私は、なんにも知らないんですから。

猪子蓮太郎
まあ、何とか、そのところは御相談の為ようが有そうなもの。悪いことは申しません。御互いの身の為です。決して誰の為でも無いのです。瀬川さん
いづれ、また私も御邪魔に伺いますから、よく考えて下さい。

三幕二場

藤村が来る。

島崎藤村

夕飯の後、蓮華寺では説教の支度をするので忙しかった。昔からの習慣《ならわし》として、大提灯《おおぢょうちん》がいくつとなく取出された。寺内の若僧、庄馬鹿、子坊主までよってたかって、火を点《とも》して、それを本堂へ運ぶ。三人はその為に長い廊下を行ったり来たりした。

お志保が来る。

お志保

説教聞きにと、ころぎす人々は次第に本堂へ集って来た。

島崎藤村

寺につく檀家《だんか》のものはさらなり、すでにもう一生の行程《つとめ》を終わった爺さん婆さんの群ばかりで無く、繁忙《せわ》しい職業に従う人々まで、それを聴こうとして熱心に集うのを見ても、いかに飯山の町が昔風の宗教と信仰との土地であるかを想像させる。

お志保

聖經《おきょう》の中にある有名な文句、比喻《たとえ》などが、普通の人の会話に交るのは珍しくも無い。

島崎藤村

丑松の身に取って、最も楽しい、又最も哀しい寺住《てらぢみ》の一夜であった。どんなに丑松は胸を踊らせて、お志保と一緒に説教聞く歓楽《たのしみ》を想像したろう。奥様を始め、お志保、省吾などは既に本堂へ上って、北の間の隅のところに集って居た。

住職が来る。

蓮華寺の住職

見れば中の中から南の間へかけて、男女《おとおんな》の信徒、あそこに一団《ひとかたまり》、ここにも一団、挨拶したり話したりする声は、忍んではするものの、何となく面白く聞える。

島崎藤村

庄馬鹿が、自慢の羽織を折目正しく着飾って、これみよがしに人々のなかを分けて歩くのも、おかしかった。その取澄ました様子を見て、奥様も笑えば、お志保も笑った。丑松の座ったところは、永代読経として寄附と姓名とを張出してある古壁の側、

蓮華寺の住職

お志保も近くて、髪が心地よくかおりにかかる。提灯の影は花やかに本堂の夜の空気を照らして、一層その横顔を若々しくして見せた。何という親しげな有様だろう、こう考えて、お志保の方を熟視《みまも》る度《たび》に、言うに言われぬ楽しさを覚えるのであった。

住職、お志保に抱き付く。

お志保、抵抗する。

藤村が住職を引きはがす。

お志保、去る。

島崎藤村 住職は奥様と同年《おないどし》という。男のことであるから割合に

若々しく、墨染《すみぞめ》の法衣《ころも》に金襴《きんらん》の袈裟

《けさ》を掛け、佐久小泉辺《さくちひさがたあたり》に多い世間的な僧侶に比べると、遙かに高尚な宗教生活を送って来た人らしい。

丑松が来る。

瀬川丑松 額広く、鼻隆く、眉すこし迫って、容貌《おもげせ》も立派な上に、温和な、

善良な、性質をよく表して居る。法話は猿の比喻《たとえ》で始まった。

蓮華寺の住職

智識のある猿は世に知らないということが無い。よく学び、よく覚え、

多くの経文を暗誦して、万人の師匠ともなるべき程の学問を蓄くわえた。畜生の悲しさには、ただ一つ信ずる力を欠いた。人は、猿ほどの智識が無いにもせよ、信ずる力あって、はじめて仏の境には到り得る。

人間と生れた、ありがたさ、朝夕念仏を怠り給うな。

島崎藤村

なむあみだぶ、なむあみだぶ。

蓮華寺の住職

人々の唱える声は本堂の広間に満ち溢れた。男も、女も、思い思いに賽銭

瀬川丑松

なむあみだぶ、なむあみだぶ。

蓮華寺の住職

やがて聴衆は珠数を提《さ》げて帰って行った。

住職、去る。

島崎藤村

奥様も、お志保も、今は座を離れて、円柱の側に佇立《たたず》みながら、人々に挨拶したり見送ったりした。雪がまた降って来たというので、

本堂の入口は酷《ひど》く雑踏する。

奥様が来る。

奥様

次第に丑松は学校へ出勤するのが苦しくなってきた。

瀬川丑松

ある日、あまりの堪えがたさに、欠席の届を差出した。

奥様 その朝は遅くまで寝ていた。

島崎藤村 八時打ち、九時打ち、やがて十時打っても、まだ丑松は寝ていた。

瀬川丑松 袈裟治は部屋の掃除をすまして、とっくに雑巾掛《ぞうきんがけ》までしてしまった。なんだか二階へも上って来て見た。

島崎藤村 来て見ると、丑松は疲れて、蒼ざめて寢床の上に倒れている。

奥様 あちらの隅に書物、こちらの隅に風呂敷包、すべてこの部屋の内に在る道具といえ、勝手に乗出して踊ったり跳ねたりした後のようで、

島崎藤村 その乱雑な光景《ありさま》は部屋の主人の心を想像させる。

半分はまだ眠りながらそこに座っているかのよう。

奥様 御飯を持って来ましようか。

島崎藤村 こう袈裟治が聞いても、丑松は食う気に成らなかったのである。

奥様 ああ、気分が悪くて居なさると見える。

瀬川丑松 と独語《ひとりごと》のように言いながら、袈裟治は出て行った。

島崎藤村 それは北国の冬らしい、寂しい日であった。

瀬川丑松 ちいさな冬の蠅は部屋の内に残って、障子をめがけては、あちこち飛びちがっていた。朝寝の床は絶望した人を葬る墓のようなもので有ろう。

奥様 瀬川先生、御客様でやすよ。

瀬川丑松 と喚起《よびおこ》す袈裟治の声に驚かされて、

島崎藤村 丑松は銀之助が来たことを知った。銀之助ばかりでは無い、準教員も勤務《つとめ》のままの服装《みなり》でやって来た。その日は、午後の課業が休みと成ったから、暇を見て尋ねて来たという。

銀之助が来る。

島崎藤村 丑松は寢床の上に起直って、半ば夢のように友達の顔を眺めた。

土屋銀之助 君、寝て居たまえな。

奥様 丑松は掛蒲団の上にある白い毛布を取って、襦袢《どてら》を着たような具合に、身に纏《まと》いながら、

瀬川丑松 失敬するよ、僕はこんなものを着て居るから。ナニ、君、そんなに酷《ひど》く不良《わる》くもないんだから。

島崎藤村 風邪ですか。

奥様 と準教員は丑松の顔を熟視《みまも》る。

瀬川丑松 まあ、風邪だろうと思うんです。昨夜から非常に頭が重くて、どうしても今朝は起きることが出来ませんでした。

土屋銀之助 道理で、顔色が悪い。インフルエンザが流行《はや》るといふから、気をつけ給え。何か飲んで見たらどうだい。焼味噌のすこし黒焦《くろこげ》に

なつたやつを茶漬茶碗かなんかに入れて、そこへ熱湯《にえゆ》を注込
《つぎこ》んで、二三杯やって見給え。大抵の風邪は治つてしまふよ。

や、好物を持って来て、出すのを忘れたそれ、御土産《おみやげ》だ。

奥様　こう言つて、風呂敷包の中から取出したのは、十一月分の月給。

土屋銀之助　今日は君が来ないから、代理に受取つて置いた。よく改めて見てくれ給え。

瀬川丑松　ありがとう。今日は二十八日かねえ。また二十七日だとばかり思つていた。

土屋銀之助　は、は、は、月給取が日を忘れるようぢやあ仕様がな。

瀬川丑松　全く、ぼんやりして居た。

奥様　その時、準教員が、唐突《だしぬけ》に、こんなことを言出した。

島崎藤村　今日僕は妙なことを聞いて来た。学校の職員の中に一人新平民が隠れて

居るなんて、そんなことを町の方で噂するものが有るそうだ。

土屋銀之助　誰が其様なことを言出したんだろう。

島崎藤村　誰が言出したか、僕も知らないがね。要するに、人の噂に過ぎないだろう。

土屋銀之助　噂にもよりけりさ。よく町の人は色々なことを噂する。やれ、女の教員が

どうしたの、男の教員がこうしたのツて。なぜそう人の噂がしたいんだろう。

そんなら、君、まあ学校の職員を数えて見給え。穢多らしいような顔付の

ものがあるかい。実に怪しからんことを言うぢやないか。ねえ、瀬川君。

奥様　こう言つて、銀之助は丑松の方を見た。丑松は無言で毛布に身を包んだまま。

土屋銀之助　は、は、は。校長先生は几帳面《きちょうめん》な方だが、なんぼなんでも

新平民とは思われないし、と言つて、教員仲間に見当りそうも無い。いやに

気取つてるのは勝野君だ。そんな嫌疑のかかるのは勝野君ぐらいのものだ。

島崎藤村　まさか。

土屋銀之助　そんなら、君、誰だと思ふ。さしづめ、君ぢやないか。

島崎藤村　馬鹿なことを言い給え。

土屋銀之助　は、は、は、君はすぐにそう怒るからいかん。

島崎藤村　しかし。これももし事実だと仮定すれば

土屋銀之助　事実？とうてい有得べからざる事実だ。

島崎藤村　だから僕だつても事実だと言つた訳では無いサ。もし事実だと仮定すれば、

と言つたんサ。しかし万一そんなことが有るとすれば、どういう結果に

なつて行くものだろう、僕は考えたばかりでも恐ろしいような気がする。

奥様　銀之助は答えなかつた。二人の客はもうそれぎりこんな話をしなかつた。

やがて二人が言葉を残して出て行くこうとした時は、丑松は喪心した人の

ようで、その顔色は白い毛布に映つて、一層蒼ざめて見えたのである。

土屋銀之助　ああ、瀬川君はまだよくないだろう。

奥様　こう銀之助は自分で自分に言いながら、準教員と一緒に梯子段

《はしごだん》を下りて行った。

銀之助、去る。

島崎藤村 しばらく丑松は茫然として部屋の内を眺め廻して居たが、ふと思いついたように、押入の隅のところに隠して置いた書物を取出した。それはいずれも蓮太郎を思い出させるもので、先輩が精力を注ぎ尽したという

瀬川丑松 『現代の思潮と下層社会』、『平凡なる人』、『労働』、『貧しきものの慰め』、それから

瀬川丑松 『懺悔録』

島崎藤村 丑松は中をよく改めて見て、蔵書の印がわりに捺《お》して置いた自分の認印《みとめ》を消して了った。ほかに、床の間に置並べた語学の参考書の中から、五六冊不要なのを抜取って、塵埃《ほこり》を払って、一緒にして風呂敷に包んで居ると、そこへ袈裟治が入って来た。

瀬川丑松 奥様 御出掛？この寒いのに御出掛なさるんですか。気分が悪くて寝て居なさる人が、まあ。

瀬川丑松 いや、もうすっかり快くなった。

奥様 御腹《おなか》が空きやしたろう。何か食べて行きなすったら。あんたは今朝から、なんにも食べなさらないぢやごせんか。

島崎藤村 丑松は首を振って、すこしも腹は空かないと言った。壁に懸けてある外套《がითう》を除《はづ》して着たのも、帽子を冠ったのも、着る積りも無く着、冠る積りも無く冠ったので、

瀬川丑松 器械が動くように、自分で自分の為《す》ることを知らない位であった。丑松はまた、友達が持って来て呉れた月給を机の抽匣《ひきだし》の中へ入れて、その内を紙の袋のまま袂へも入れた。

島崎藤村 書物の包をなるべく外套の袖で隠すようにして、蓮華寺の門を出た。

奥様 雪は往来にも、屋根の上にもあった。人や馬の曳く雪橇《ゆきぞり》は幾台《いくつ》か丑松の側を通り過ぎた。

瀬川丑松 長い廻廊のような雪除《ゆきよけ》の『がんぎ』（軒廂《のきびさし》）ももう役に立つようになった。往来の真中に堆高《うづだか》く掻集めた白い小山の連接《つづぎ》を見ると、今に家々の軒丈よりも高く降り積って、これが飯山名物の『雪山』と唄《うた》われるかと、冬期の生活《なりわい》の苦痛《くるしみ》を今更のように堪えがたく思い出させる。

島崎藤村 空の模様はまた雪にでも成るか。薄い日のひかりを眺めたばかりでも、丑松は歩きながら慄《ふる》えたのである。

瀬川丑松 上町《かみまち》の古本屋にはかつて雑誌を引取って貰った。店頭《みせさき》に客の居なかったのを幸《さいわい》、

島崎藤村 ついと丑松は帽子を脱いで入って、例の風呂敷包を何気なく取出した。
瀬川丑松 すこしばかり本を持って来ました。これを引取って頂きたいのですが。

奥様 亭主は丑松の顔色を読んで、商人《あきんど》らしく笑って、やがて膝を進めながら風呂敷包を手前へ引寄せた。

瀬川丑松 ナニ、いくらでも好いんですから。

島崎藤村 いかほどばかりで、御譲りに成る御積りなんですか。

瀬川丑松 まあ、貴方の方で思ったところをつけて見て下さい。

島崎藤村 どうも不景気です、一向にこういうものが捌《は》けやせん。御引取り申してもようごはすが、あまり些少《いささか》で。実は申上げるに
しやしても、是方《こちら》の英語の方だけの御直段《おねだん》で、
猪子さんの新刊物の方はほんの御愛嬌《ごあいきょう》こりや御持帰りに成りやした方が御為かも知れやせん。

瀬川丑松 まあ、そう言わずに、引取れるものなら引取って下さい。

島崎藤村 あまり些少《いささか》ですが、ようごわすか。そんなら、別々に申上げやしようか。それとも籠《こ》めて申上げやしようか。

瀬川丑松 籠めて言つて見て下さい。

島崎藤村 いかがでしょう、精一杯なところを申上げて、五十五銭。それで宜《よろ》しかったら御引取り申して置きやす。

瀬川丑松 五十五銭？

奥様 と丑松は寂しそうに笑った。もとより、いくらでもいいから引取って貰う気。すぐに話は纏《まとま》った。ああ 書物ばかりは売るものでないと、思わないではないが、ここへ持って来たのは特別の事情がある。

瀬川丑松 五十五銭を受取った。

奥様 丑松の心は暗かったのである。古本屋を出て、自分の為《し》たことを考えながら歩いた時は、もう哭《な》きたい程の思いで帰った。

瀬川丑松 先生、先生。許して下さい。

奥様 と口の中で繰返した。

瀬川丑松 あの高柳に蓮太郎と自分とは何の関係もないと言ったことを思い出した。

鋭い良心の詰責《とがめ》は、身を衛《まも》る弁解《いいわけ》と闘って、胸に刺されるような深い深い悲痛《いたみ》を感じる。

島崎藤村 丑松は羞《は》ぢたり、

奥様 畏《おそ》れたりしながら、

瀬川丑松 どこへ行くという目的もなしに歩いた。

三幕三場

蓮太郎が来る

猪子蓮太郎 一ぜんめし、御酒肴《おんさけさかな》、笹屋、としてあるは、

以前、敬之進と一緒に飲んだところ。丑松の足は自然とそちらの方へ向いた。

表の障子を開けて入ると、二三の客もあつて、のみくいしている様子。

主婦《かみさん》は流許《ながしもと》へ行ったり、竈《かまど》

の前に立ったりして、忙しそうに働いていた。

丑松が来る。

瀬川丑松 主婦《かみ》さん、何かありますか。

猪子蓮太郎 生憎《あいにく》今日《こんち》は何《なんに》もなく御気の毒だいなあ。

川魚の煮《た》いたのに、豆腐の汁《つゆ》ならごわす。

瀬川丑松 そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。

猪子蓮太郎 その時、一人の行商が腰掛けて居た樽《たる》を離れて、浅黄の手拭で

頭を包みながら、丑松の方を振り返って見た。雪靴のままで柱によりかかって
いた百姓も、盗むように見た。

瀬川丑松 主婦《かみさん》が傾《かし》げた大徳利の口をコップに受けて、

茶色にいきの立つ酒をなみなみと注いで貰い、立って飲みながら、

上目で丑松を眺める櫛曳《そりひき》らしい労働者もあつた。こういう風に、
人々の視線が集まつたのは、毛色の異《かわ》つた客が入つて来た為、放肆

《ほしいまま》な雑談を妨《さまた》げられたからで。

猪子蓮太郎 もっとも、この物見高い沈黙はわずかの間であつた。

瀬川丑松 やがてまた盛んな笑声が起つた。

猪子蓮太郎 炉の火も燃え上つた。丑松は胡桃足《くるみあし》の膳を引寄せて、

黙って飲んだり食つたりして居ると、出て行く行商とすれ違ひに

釣の道具を持って入つて来た男がある。

敬之進が来る。

風間敬之進 よう、めずらしい御客様が来てますね。

瀬川丑松 風間さん、釣ですか。

風間敬之進 いや、どうも、寒いので寒いので。とても川端で辛棒が出来ないから、

やめて帰つて来た。

瀬川丑松 ちったあ釣れましたかね。

風間敬之進 獲物《ええもの》なしサ。朝から寒い思をして、一匹も釣れないでは君、やりきれないぢやないか。

瀬川丑松 とりあえず、一つ差上げましょう。

風間敬之進 へえ、我輩に呉れるのかね。こりゃあ驚いた。君から盃を貰おうとは思はなかつた。道理で今日は釣れない訳だよ。

猪子蓮太郎 と思わず流れ落ちる涎《よだれ》を拭いたのである。

瀬川丑松 間も無く酒瓶《ちようし》の熱いのが来た。

猪子蓮太郎 敬之進は寒さと酒慾とで身を震わせながら、さもさも甘《うま》そうに地酒の香を嗅いで見て、

風間敬之進 しばらく君には逢わなかつたような気がするねえ。我輩も君、学校を休《や

めてから別にこれという用が無いもんだから、こんな釣なぞを始めて、

何ですか、この雪の中で釣れるんですか。

瀬川丑松 素人《しろうと》はこれだから困る。もつとも我輩だつて素人だがね。

風間敬之進 はハハハ。まあ商売人に言わせると、冬はまた冬で、人の知らないところ

に面白味がある。ナニ、風さえ無けりゃ、そう思つた程でも無いよ。しかし、

考えて見て呉れ給え。何が辛いと言つたつて、用が無くて生きて居るほど

世の中に辛いことは無いね。家内やなんか、せつせと働いて居る側で、

自分ばかり懐手《ふところ》して見ても居られずサ。まだそれでも、

こうして釣に出られるような日は好いが、屋外《そと》へも出られないよう

な日と来ては、実に我輩はする事が無くて困る。そういう日には、君、

他に仕方が無いから、まあ昼寝を為ることにきめてね、ああ、瀬川君。

実は、こないだ、久し振で娘に逢いました。

瀬川丑松 お志保さんに？

猪子蓮太郎 丑松の胸は何となく踊るのであつた。

風間敬之進 というのは、君、娘の方から逢つてくれるという、ことづけがあつて、

もつとも、我輩もね、君の知ってる通り蓮華寺とは、ああいう訳だし、

それに家内は家内だし、するからして、成るべく娘には逢わないようにして

いる。ところが何か相談したいことが有ると言うもんだから、まあ、その、

久し振で逢つて見た。どうも若いものがずんずん大きく成るのには驚いて

しまうねえ。まるで見違える位。それで君、何の相談かと思つと、もうどう

しても蓮華寺には居られない、一日も早く家《うち》へ帰るようにして呉れ、

頼む、と言う。事情を聞いて見ると無理もない。その時、我輩も始めて

あの住職の性質を知つたような訳サ。

猪子蓮太郎 と言つて、敬之進は一寸徳利を振つて見た。あいにく酒は盃《さかづき》に

満たなかつた。やがて一口飲んで、

風間敬之進

こうです。まあ、君、聞いてくれ給え。よく世間には立派な人物だと言われているながら、女性《おんな》というものにかけて、非常に弱い性質《たち》の男があるものだね。蓮華寺の住職も矢張《やはり》そうだろうと思うよ。あれほど学問もあり、弁才もあり、何一つ備わらないところの無い好い人で、ことに宗教《おしえ》の方の修行もして居ながら、それでまだ迷いが出るといふのは、君、どういう訳だろう。我輩は娘からあの住職のことを聞いた時、どうしても信じられなかった。いや、嘘だと思われなかった。実に人は見かけによらないものさね。娘はもう悲いやら恐しいやらで、夜も寝られなйтと言う。だから、娘が家《うち》へ帰りたいと言うのは、実際無理もない。そんなところへ娘を遣《や》って置きたくは無。そりゃあもう一日も早く引取りたい。そこがそれ情ないことには、今の家内がもうすこし解っていてくれると、どうにでもして親子でやって行かれないことも有るまいと思ってくれると、現に省吾一人にすら持余して居るところへ、またお志保の奴が飛込んで来て見給え。とても今の家内と一緒にいられるもんぢや無い。第一、八人の親子がどうして食えよう。それやこれやを考えると、我輩の口から娘に帰れとは言われないぢやないか。たとえ先方《さき》が親らしい行為をしないまでも、これまで育てて貰った恩義も有る。一旦蓮華寺の娘と成った以上は、どんな辛いことがあらうと決して家《うち》へ帰るな。そこを勤め抜くのが孝行というものだ。とまあ、すかしたり励《はげま》したりして、無理やりに娘を追立ててやったよ。思えば可愛そうなものさ。ああ、ああ、こういう時に先の家内が生きていたならば

猪子蓮太郎

敬之進の顔には真実と苦痛とが表れて、眼は涙の為に濡れた。そう言われて見ると、丑松も思い当ることがないでもない。あの蓮華寺の内部《なか》の光景《ありさま》を考えると、暗い雲が隅に蟠《わだかま》って、絶えず家庭の累《わづらい》を引起す原因《もと》で、住職と奥様とは無言の間に闘って居るかのようだと丑松も想像して居た。よもやその雲のわだかまりが、お志保の上にあるとは思ひもしなかったのである。

瀬川丑松

長いこと悄然《しよんぼり》として、二人は互いに無言のままに相対《さしむかい》に成って居た。

三幕四場

お志保が来る。

お志保 月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。応接室の側の一間を自分の室と

定めて、毎朝授業の始まる前には、必ずそこに閉籠《とちこも》るのが癖。

それは事務の準備《したく》をする為でもあったが、又一つには

職員等《たち》の不平と煙草の臭気《におい》とを避ける為で。

任職が来る。

蓮華寺の住職 この室の戸を叩くものが有る。

お志保 その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。いつもこういう風に
して、校長はこのお気入りの教員から、様々の秘密な報告を聞くのである。

猪子の妻 教員の蔭口、其他時間割と月給とに関する五月蠅《うるさい》ほどの
嫉《ねた》みと争いとは、

蓮華寺の住職 ここに居て手に取るように解るのである。この朝もまた、何か新しい
秘密をもたらして来たのであろう、

お志保 こう思いながら、校長は文平をなかへ導いたのであった。

猪子の妻が来る。

お志保 いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。

蓮華寺の住職 勝野君。君は今、妙なことを言ったね。何か瀬川君のことに就いて新しい
事実を発見したとか言ったね。

猪子の妻 はあ。

蓮華寺の住職 どうも君の話は解りにくくて困るよ。遠廻しに匂わせてばかり居るから。

猪子の妻 だって、校長先生、人の一生の名誉に関《かか》わるようなことを、

そう迂濶《うかつ》にはしゃべれないぢや有ませんか。

蓮華寺の住職 ホウ、一生の名誉に？

猪子の妻 まあ、私の聞いたのが事実だとして、それがこの町へ知れ渡ったら、

恐らく瀬川君は学校にいられなくなるでしょうよ。学校にいられないばか
りぢやない、あるいは社会から追放されて、二度と世に立つことが出来なく
なるかも知れません。

蓮華寺の住職

へえ。学校にも居られなくなる、社会からも追放される、と言えは君、
非常なことだ。それではまるで死刑を宣告されるも同じだ。

猪子の妻　まずそう言ったようなものでしょうよ。もつとも、私が直接《ぢか》に突留めたという訳でも無いのですが、色々なことをあつめて考えて見ますと、ふふ。

蓮華寺の住職　ふふ、ぢゃ解らないねえ。まあ話して聞かせてくれ給え。

猪子の妻　しかし、校長先生、私からそんな話が出たということになりますと、すこし私も迷惑します。

蓮華寺の住職　なぜ？

猪子の妻　何故ツて、そうぢゃ有ませんか。私が取って代りたい為に、そのようなことを言いふらしたと思われても厭ですから。毛頭、私はそんな野心がないんですから、なにも瀬川君を中傷する為に、御話するのではないんですから。解つてますよ、そんなことは。誰が君、そんなことを言うもんですか。

蓮華寺の住職　そんな心配が要るもんですか。君だっても他の人から聞いたことなんでしょう。それ、見たまえ。

お志保　文平が思わせ振な様子をして、何か意味ありげに微笑めば微笑むほど、余計に校長は聞かずに居られなくなつた。

蓮華寺の住職　では、勝野君、こういうことにしたらいいでしょう。我輩はその話を君から聞かない分にして置いたらいいでしょう。さ、誰も居ませんから、話して聞かせてくれ給え。

お志保　こう言つて、校長は文平に耳を貸した。

猪子の妻、住職に耳打ちする。

お志保　文平が何か私語《ささや》いて聞かせた時は、見る見る校長も顔色を変えてしまつた。急に戸を叩く音がする。ついと文平は校長の側を離れて窓の方へ行つた。戸を開けて入つて来たのは

丑松が来る。

お志保　丑松で、入るや否や思わず一步《ひとあし》逡巡《あとずさり》した。

瀬川丑松　何を話して居たのだろう、この二人は。

お志保　と丑松は猜疑深《うたぐりぶか》い目付をして、二人の様子を怪まずには居られなかつたのである。

瀬川丑松　校長先生、

お志保　と丑松は何気なく尋ねて見た。

お志保、去る。

瀬川丑松 どうでしょう、今日はすこし遅く始めましたら。

蓮華寺の住職 さよう、生徒は、まだ集りませんか。

瀬川丑松 どうも思うように集りません。何を言っても、この雪ですから。

蓮華寺の住職 しかし、もう時間は来ました。生徒の集る、集らないは。兎に角、規則というものが第一です。どうぞ小使に言って、鈴を鳴らさせて下さい。

瀬川丑松 わかりました。

丑松、去る。

蓮華寺の住職 一体、君は誰から瀬川君のことを聞いて来たのかね。

猪子の妻 妙な人から聞いて来ました。実に妙な人から

蓮華寺の住職 どうも我輩には見当がつかない。

猪子の妻 人の名譽にも関わるからだから、話だけするが、名前を出してくれては困る、と先方《さき》の人も言うんです。代議士にでも成ろうという位の人物ですから、無責任なことを言う筈《はず》も有ません。

蓮華寺の住職 代議士にでも？

猪子の妻 ホラ。

蓮華寺の住職 じゃあ、あの新しい細君を連れて帰って来た人じゃ有ませんか。

猪子の妻 まあ、そこいらです。

蓮華寺の住職 して見ると。ははあ、あの先生が地方廻りでもして居る間に、どこかでそんな話を聞込んで来たものかしら。しかし、驚ろいたねえ。
瀬川君が穢多だなどとは、夢にも思わなかった。

猪子の妻 実際、私も意外でした。

蓮華寺の住職 見給え、あの容貌《ようぼう》を。皮膚といい、骨格といい、賤民らしいところが有るとも思われないぢやないか。

猪子の妻 ですから世間の人が欺《だま》されて居たんでしょう。

蓮華寺の住職 そうですかねえ。解らないものさねえ。

猪子の妻 容貌ほど人を欺すものは有ませんさ。そんなら、どうでしょう、あの性質は。性質だっても君、そんな判断は下せない。

猪子の妻 では、校長先生、よく注意して、瀬川丑松という人を御覧なさい、

どうでしょう、あの物を視る猜疑深《うたがひぶか》い目付などは。

蓮華寺の住職 は、ハ、ハ、ハ、猜疑深いからと言って、それが穢多の証拠には成らないやね。

猪子の妻 まあ、聞いて下さい。こないだまで瀬川君は鷹匠《たかしやう》町の下宿に

いましたらう。あの下宿で穢多の大尽が追い出されましたらう。すると

瀬川君は突然《だしぬけ》に蓮華寺へ引っ越してしまいましたらう。ホラ、おかしいぢや有ませんか。』

蓮華寺の住職 それさ、それを我輩も思うのさ。

猪子の妻 猪子蓮太郎との関係だってもそうでしょう。あんな

病的な思想家ばかりありがたく思わないだって、他にいくらも有そうなものぢや有ませんか。穢多の書いたものばかり特に大騒ぎしなくても好さそうなものぢや有ませんか。どうも瀬川君が鼻顧《ひいき》の仕方は普通の愛読者と少し違うぢや有ませんか。

蓮華寺の住職 それにしても、よく知れずに居たものさ、どうも瀬川君の様子が

おかしいと思ったよ、訳もなしに、ああ考え込む筈《はず》が無いからねえ。勝野君。なるほど、君の言った通りだ。一生の名誉にも関わることだ。まあ、もうすこし瀬川君の秘密を探って見ることにしようぢやないか。

猪子の妻 この話が、あの代議士の候補者から出たということだけは決して

蓮華寺の住職 無論さ。言わないで下さい。さもないと、私が非常に迷惑しますから。

三幕五場

敬之進が来る。

風間敬之進 宵の勤行《おつとめ》の鉦《かね》の音は一種異様な響を丑松の耳に伝えるように成った。もう世離れた精舎《しょうじゃ》の声のようにも聞えなかった。今同じ人間世界の情慾の声、という感じしか耳の底に残らない。

奥様が来る。

奥様 丑松は敬之進の物語を思い浮べた。住職を卑しむ心は、卑しむというよりは怖れる心が、胸をついて湧上って来る。しかしお志保は香《か》のある花だ、二階へ通う廊下で、丑松はお志保に逢った。

丑松が来る。

瀬川丑松 蒼ざめて死んだような女の顔付と、悲しみのあふ黒眸《くろひとみ》たとえ黄昏時《たそがれどき》の仄《ほの》かな光のなかにも
風間敬之進 丑松の眼に映る。お志保もまた不思議そうに丑松の顔を眺めて、喪心《そうしん》した人のような男の様子を注意して見るらしい。

瀬川丑松 黙って会釈《えしゃく》して別れたのである。自分の部屋へ入って見ると、もうそこいらは薄暗かった。

風間敬之進 しかし丑松はランプを点けようと為なかった。

瀬川丑松 長いこと茫然として、独りで暗い部屋の内に座っていた。

奥様 瀬川さん、御勉強ですか。

風間敬之進 と声を掛けて、奥様が入って来たのは、それから二時間ばかり経ったこと。
奥様 どうぞ私に手紙を一本書いて下さいませんか、すみませんが。

瀬川丑松 手紙を？

奥様 長野の寺院《てら》に居る妹のところへ遣《や》りたいのですがね、実は自分で書かうと思ひまして、書きかけては見たんです。どうも私共の手紙は、長くばかりなって、肝心の思うことが書けないものですから。いっそこりや貴方《あなた》に御願ひ申して、手短く書いて頂きたいと思ひまして。いえ、なに、そんなに煩《むづか》しい手紙でも有ません。ただ解るように書いて頂きさえすれば好いのですから。

瀬川丑松 書きましよう。

風間敬之進 と丑松は簡短に引受けた。この答えに力を得て、奥様は手紙の意味を話した。

奥様 一身上のことに就いて相談したい。この手紙 着次第《ちゃくしだい》、是非々々々々出掛けて来るように、と書いてくれと頼んだ。

蟹沢から飯山までは便船も発《た》つ、もし舟が嫌なら、途中迄車に乗って、それから雪橇に乗替えて来るように、今度という今度こそは諦めた、自分は今もう離縁する考えで居る、

と書いて呉れと頼んだ。

奥様 他の人とは違って、貴方ですから、私もこんなことを御願ひするんです。

訳を御話しませんか、不思議だと思つて下さるかも知れませんが

瀬川丑松 いや。私も薄々聞きました。実は、あの風間さんから。

奥様 ホウ、そうですか。敬之進さんから御聞きでしたか。

瀬川丑松 もつとも、詳しい事は私も知らないんですけれど。

奥様 ああ、うちの和尚さんも彼年齢《あのとし》になつて、まだ今度のような

ことが有るといふは、全く病気なんです。まあ、瀬川さん、そうぢやありませんか。和尚さんもね、彼病氣さえ無ければ、実に気分の優しい、好い人物《ひと》なんです。申分の無い人物なんです。私は今だつても和尚さんを信じて居るんです。どうして私はこう物に感じ易いんでしょう。

風間敬之進 と奥様は啜《すす》り上げた。

奥様 今度のようなことが有ると、もう私はなんにも手に着きません。

一体、和尚さんの病氣というのは、今更始つたことでも無いんです。

先住は早く亡《な》くなりまして、和尚さんその後へ直つたのは、

まだようやく十七の年だったということでした。和尚さんの病氣はもう

その頃から起つて居たんですね。相手の女というのは、西京の魚《うお》の棚

《たな》、油《あぶら》の小路《こうぢ》というところにある宿屋の総領娘、

お金を遣つて、女の方の手を切らせました。そこで和尚さんも、本当に懲

りなければ成らないところです。ところが持つて生れた病は仕方の無い

もので、それから三年経つて、今度は東京にある真宗の学校へ勤めることに

成ると、また病氣が起りました。

瀬川丑松 手紙を書いて貰いに來た奥様は、用をそつちのけにして、いろいろ並べたり

訴えたりし始めた。淡泊《さつぱり》したようでもそこは女の持前で、聞いて

貰わずには居られなかつたのである。

風間敬之進

奥様の述懐を聞取つて、丑松は望みの通りに手紙の文句を認《したた》めて

やつた。幾度か奥様は口の中で仏の名を唱《とな》えながら、これから将来

《さき》のことを思い煩《わづら》うという様子に見えるのであつた。

奥様 おやすみ。

奥様 去る。

風間敬之進

という言葉を残して置いて奥様が出て行った後、丑松は机の側に倒れて考えて居た。雪は屋外《そと》に降り積ると見え、時々窓の戸にあたって、はたはたと物の崩れ落ちる音より外には、寂《しん》として声一つしない、それは沈静《ひっそり》とした、気の遠くなるような夜。人の起きて居る時刻では無かった。階下《した》では皆な寝たらしい。ふと、何か忍《しの》び音《ね》に泣くような若い人の声が細々と耳に入る。梯子段《はしごだん》の下あたり、暗い廊下の辺でもあるか、誰かしら声を呑《の》む様子。尚《なお》聞くと、北の廊下の雨戸でも明けて、屋外《そと》を眺めて居るものらしい。ああ。お志保だ。お志保のすすり泣きだ。こう思いつくと

同時に、言うに言われぬ恐れと憐れみとが身を襲うように感ぜられた。

暗転

四幕一場

藤村が来る。

島崎藤村 この大雪を衝《つ》いて、市村弁護士と連太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、という噂は学校に居る丑松の耳にまで入った。高柳一味の党派は、今更のよう
に防御を始めたとやら。有権者の訪問、推薦状の配付、さては秘密の勧誘なぞがしきりに行われる。高柳派の選挙の争闘《あらしい》は次第に近づいて来たのである。

瀬川丑松 その日は宿直の当番として、銀之助と学校に居残ることに成った。

もっとも銀之助は抛《よんどころ》ない用事が有ると言って出て行って、日暮になってもまだ帰って来なかつたので、

島崎藤村 丑松は絶えず不安の状態《ありさま》暇さえあれば宿直室の畳の上に倒れて、独りで考えたり悶《もだ》えたりしたのである。

瀬川丑松 入相《いりあい》を告げる蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃は、ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、

島崎藤村 何となくお志保の身の上も案じられる。

瀬川丑松 さまざまの想像に耽りながら、悄然《しよんぼり》と五分心の火を熟視《みつ》めて居るうちに、そこで寝てしまったのである。

島崎藤村 その時、お志保が入って来た。

お志保が来る。

瀬川丑松 ここは学校では無いか。どうしてこんなところにお志保さんが。

島崎藤村 お志保は何か言いたいことが有って、わざわざ自分のところへ逢いに来たのだ、あの夢見るような、柔嫩《やわらか》な眼。お志保が言おうと思うことはありありと読まれる。

お志保 何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。

何故、優しい言葉の一つも懸けてくれないの。

何故、口唇《くちびる》は言いたいことも言わないで、堅く閉ぢ塞がって恐れと苦しみとで震えているの。

猪子の妻が来る。

島崎藤村 一つの間にか文平が入って来て、用事ありげにお志保を促した。恥ずかしがるお志保の手を執《と》って、無理やりに引立てて行こうとする。

瀬川丑松 勝野君、まあ待ち給え。そう君のように無理なことをしなくツても好かろう。

島崎藤村 と言つて、丑松は押しとどめるようにした。その時、文平も丑松の方を

振返つて見た。二人の目は電光《いなづま》のように出逢つた。

猪子の妻 お志保さん、あなたに、いいことを教えてあげる。

島崎藤村 と文平はお志保の耳へ口を寄せて、丑松が隠蔽《かく》している恐しい秘密を

ささやいて聞かせるような態度を示した。

瀬川丑松 あツ、そんなことを聞かせてどうする。

島崎藤村 と丑松は、あわてて、とりすがろうとして、ふと。

瀬川丑松 眼が覚めたのである。

お志保、去る。

島崎藤村 夢であつた。我に帰ると同時に、苦しみは身を離れた。

瀬川丑松 しかし夢の印象は、なお残つて、覚めた後までも恐れ的心が退かない。

猪子の妻 室内を眺め廻すと、お志保も居なければ、文平も居なかつた。

猪子の妻、去る。

島崎藤村 そこへ風呂敷包を擁《かか》え、戸を開けて入つて来たのは銀之助であつた。

銀之助が来る。

土屋銀之助 や、どうも大変遅くなつた。瀬川君、まだ君は起きて居たのかい。

島崎藤村 こう声を掛ける。やがて銀之助は靴の音をさせながら、洋服の上衣を脱いで

無造作にズボン釣を外すやらして、

土屋銀之助 なぜ、君はそうだろう。僕がこういう科学書生で、平素《しよっちゅう》

そっちの研究にばかり頭を突込んでるものだから、話したつて解らない、

と君は思うだろう。しかし、君、僕だつて冷い人間ぢや無いよ。

人の苦んでいるのを、傍《はた》で観て嘲笑《わら》つてるような、

そんな残酷な人間ぢや無いよ。

瀬川丑松 また妙なことを言うね、誰も君のことを残酷だと言つたものは無いのに。

土屋銀之助 そんなら僕にだつて話して聞かせてくれ給えな。

瀬川丑松 話せとは？

土屋銀之助 何も君のように蔵《つつ》んで居る必要は有るまいと思ふんだ。まあ、僕も、

一時はあまり解剖的にばかり見過ぎていたが、大いに悟つたことが有る。

それからずっと君の心情《こころもち》も解るようになつた。

何故君があゝの蓮華寺へ引越したか、なぜ君が独りで苦んで居るか
僕はもう何もかも察している。

島崎藤村
土屋銀之助

丑松は答えなかった。銀之助はなお言葉を継いで、
校長先生なぞに言わせると、こういうことは三文の価値《ねうち》も
無いね。何ぞと言うと、今の青年の病気だ。しかし、君、考えて見給え。
校長先生だつて一度は若い時も有つたらうぢやないか。だから僕は言つて
やつたよ。今日、校長先生と郡視学とで僕を呼付けて、

「なぜ瀬川君は、ああ考え込んで居るんだろう」とこう聞くから、
「それはあなたがたも覚えが有るでしょう、誰だつて若い時は同じことです」
と言つてやつた。

瀬川丑松

フウ、そうかねえ、郡視学がそんなことを聞いたかねえ。

土屋銀之助

見給え、君があまり沈んでるもんだから、だから君は誤解されるんだ。

瀬川丑松

誤解されるとは？

土屋銀之助
瀬川丑松

君を新平民だろつて、実に途方もないことを言う人も有れば有るものだ。
はゝゝゝ。しかし、君、僕が新平民だとしたところで、一向差支は
ないぢやないか。ああ、僕は眠くなつたよ

土屋銀之助

僕は青年時代の悲しみということを考えると、いつも君の為に泣きたくなる。
愛と名。ああ、青年を活すのもそれだし、殺すのもそれだ。実際、僕は君の
心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄せている。
だから今夜はこんなことを言出しもしたんだが、まあ、僕に言わせると、
あまり君は物を難しく考え過ぎて居るように思われるね。だつて君、そうぢや
ないか。なにも独りで苦んでばかり居なくたつても好かろう。友達というもの
が有つて見れば、そこはそれ相談の仕様によつて、随分道も開けるとい
うものさ「土屋、こうしたら、どうだろう」とか何とか、君の方から切出して
くれると、およばずながら僕だつて自分の力に出来るだけのことは尽すよ。
ああ、そう言つてくれるのは君ばかりだ。君の志は実にありがたい。打開けて
言えば、君の察してくれるようなことが有つた。確かに有つた。しかし
ふむ。

土屋銀之助

瀬川丑松

君はまだよく事情を知らないから、それでそう言つてくれるんだろうと思
うんだ。実はねえ、しかしその人は、もう。お志保さん。

島崎藤村

また二人は無言に帰つた。しばらくして、銀之助は声を懸けて見たが、
その時はもう 丑松は寝ているのであつた。

銀之助、去る。

島崎藤村

そして次の日。学校がすむと、丑松は学校を出て、急いで蓮華寺を指して

帰って行った。葦裏《くり》の入口の庭のところ立って、奥座敷の方を眺めると、白衣を着けた一人の尼が出たり入ったりして居る。奥様に頼まれて書いた手紙のことを考えると、奥様の妹という人であろうか、こう推測が付く。下女の袈裟治が台処の方から駈寄って、丑松に一枚の名刺を渡した。見れば猪子蓮太郎としてある。袈裟治は言葉添えて、今朝この客が尋ねて来たこと、宿は上町の扇屋にとったとのこと、よろしくと言置いて出て行ったことなどを話して、まだ外にでっぷり肥った洋服姿の人も表に立っていたと話した。

瀬川丑松　むむ、きつと市村さんだ。

島崎藤村　と丑松は独語《ひとりご》ちた。話の様子では確かにそれらしいのである。直に、これから尋ねて行って見ようかしら。

島崎藤村　とは続いて起って来た考えであった。人目を憚《はばか》るといふことさえなくば、無論尋ねて行きたかったのである。鳥のように飛んで行きたかったのである。

瀬川丑松　まあ、待て。

島崎藤村　と丑松は自分で自分を制止《おしとど》めた。彼の先輩と自分との間には何か深い特別の関係でも有るように見られたら、どうしよう。

瀬川丑松　書いたものを愛読してさえ、既に怪しいと思われて居るではないか。まして、うっかり尋ねて行ったりなんかして、もしや、ああ、待て、待て、日の暮れるまで待て。暗くなつてから、人知れず宿屋へ逢いに行こう。

島崎藤村　こう用心深く考えた。

瀬川丑松　それはそうと、お志保さんは、どうしたろう。

島崎藤村　その人の身の上を気遣《きづか》いながら、丑松は二階へ上って行った。始めてこの寺へ引越して来た当時のことは、ふと、胸に浮ぶ。

瀬川丑松　見れば何もかも変わらずにある。古びた火鉢も、粗末な懸物も、机も、本箱もそれに比べると人の境涯《きょうがい》の頼み難いことは、丑松はあの鷹匠《たかしょう》町の下宿から追い出された不幸な大日向を思出した。

《たかしよう》町　罵ったり騒いだりした下宿の人々を思い出した。今は他事《ひとごと》とも思われない。ああ、それは自分の運命だ。なぜ新平民ばかり卑しめられたりするのであろう。人生は無慈悲な、残酷なものだ。

島崎藤村　こう考えて、部屋の内を歩いて居ると、唐紙の開く音がした。

瀬川丑松　奥様が入って来た。

奥様が来る。

奥様　こんなことになりやしないか、と思つて私も心配していたんです。

島崎藤村 と前置をして、さて奥様は昨宵《ゆうべ》の出来事を丑松に話した。

瀬川丑松 聞いて見ると、お志保さんは郵便を出すと言って、日暮頃に門を出たつきり、もう帰って来ないとのこと。筆筒《たんす》の上に載せて置いて行った手紙は奥様へ宛てたもので。それは真心籠めて話をするように書いてあった、ところどころ涙に滲んで読めない文字すらもあったとのこと。その中には、自分一人の為に種々《さまざま》な迷惑を掛けるようでは、義理ある両親に申訳が無い。聞けば奥様は離縁の決心とやら、どうかそれだけは思いとまってくれるように、などと書いてあった。

奥様 お志保が心配で昨夜一晚中は眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。まあ、父親《おとつ》さんの方へ帰って居るらしい、

と言いますから。長野の妹も出掛けて来てくれました。来て見ると、この光景《ありさま》でしょう。どんなに妹もびっくりしましたか知れませんか。

島崎藤村 奥様はもう啜上《すすりあ》げて、不幸な娘の身の上を憐むのであった。

可愛そうに、住慣《すみな》れたところを捨て、義理ある人々を捨て、雪を踏んで逃げて行く時のその心地《こころもち》はどんなであったろう。

奥様 和尚さんだっても眼が覚めましたろうよ、今度という今度こそは。

なむあみだぶ。

島崎藤村 奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。

瀬川丑松 釣と昼寝と酒より外には働く気のない老朽な父親、泣く喧嘩する多くの

子供、就中《わけても》継母。まあ、あの家へ帰って行ったとしたところで、果してこれから将来《さき》どうなるだろう。『あゝ、お志保さんは死ぬかも知れない。』言うに言われぬ悲しい心地《こころもち》になった。

島崎藤村 急に丑松は壁を離れた。帽子を冠り、樓梯《はしごだん》を下り、蔵裏の

廊下を通り抜けて、何か用事ありげに蓮華寺の門を出た。

瀬川丑松 自分は一体何処へ行く積りなんだろう。

奥様 と丑松は二三町も歩いて来たかと思われる頃、自分で自分に尋ねて見た。

絶望と恐怖とに手を引かれて、半ば夢の心地であった。往来には町の人々が群り集って、春迄も消えずにある大雪の仕末で多忙《いそが》しそう。

瀬川丑松 とある町の角のところ、塩物売の店の横手にあたって、貼付《はりつ》けて

ある広告が目についた。大幅な洋紙に墨黒々と書いて、赤い『インキ』で二重に丸なぞが付けてある。物見高く眺めて居る人々もあった。

島崎藤村 思わず丑松も立留った。

奥様 見ると、市村弁護士の政見を発表する会で、蓮太郎の名前も演題も一緒に

書並べてあった。会場は上町の法福寺、その日午後六時から開会するとある。

島崎藤村 丑松は其広告を読んだばかりで、また前と同じ方角を指して歩いて行った。

瀬川丑松 疑心暗鬼とやら。今はそれを明い光の中に経験する。

島崎藤村 何時の間にか丑松は千曲川の畔へ出て来た。そこは『下《しも》の渡し』と言つて、水に添う一帯の河原を下瞰《みおろ》すような位置にある。渡しとは言いながら、船橋で下高井の地方へと交通するところ。

島崎藤村 長いこと丑松は千曲川の水を眺め佇立《たたず》んで居た。

島崎藤村 せめて先輩だけには自分のことを話そう、ふと、丑松は思いついたのである。瀬川丑松 ああ月明りのおぼつかなき。この光にはどれほどの物のかたちが見えると
言つたら好かろう。どれほどの色が潜んで居ると言つたら好かろう。

島崎藤村 煙るような夜の空気を浴びながら、次第にこちらへやって来る人影を認めた。演説会が終つたところだ。聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰つて来る。

いづれも激昂したり、憤慨したりして、一人として高柳を罵《ののし》らな
いものは無い。あるものは市村弁護士に投票しろと呼ぶし、あるものは又、
世にある多くの政事家に対して激烈な絶望をもらしながら歩くのであった。
奥様 兎に角、蓮太郎の演説は深い感動を町の人々に伝えたいらしい。

瀬川丑松 行つて逢おう。こう考えて、夢のように歩いた。ぶらりと扇屋の表に
立つて、軒行燈の影に身を寄せながら、なかの様子を覗いて見ると、何か
こう取込んだことでも有るかのように入たり入ったりして居る。

亭主であろう、五十ばかりの男、周章《あわただ》しそうに草履を突掛け
ながら、提灯《ちようちん》携げて出て行くこうとするのであった。

島崎藤村 呼留めて、蓮太郎のことを尋ねて見て、亭主の口から意外な報知《しらせ》
を聞取つた。法福寺の門前で先輩が襲われたということを取つた。

瀬川丑松 真実《ほんと》か、虚言《うそ》か。もし事実だとすれば、
島崎藤村 無論。高柳の復讐《ふくしう》に相違ない。

奥様 亭主の後について法福寺の方へと急いだのである。

島崎藤村 ああ、丑松が駈付けた時は、もう間に合はなかつた。丑松ばかりでは無い、
弁護士ですら間に合はなかつたと言ふ。

奥様 聞いて見ると、蓮太郎は一步《ひとあし》先へ帰ると言つて外套《がいとう》
を着て出て行く、市村弁護士は残つて後仕末をして居たとやら。

瀬川丑松 傷というは石か何かで烈しく撃たれたもの。

島崎藤村 たださえ病弱な身、まして疲れた後。

奥様 何の抵抗《てむかい》も出来なかつたらしい。

瀬川丑松 血は雪の上を流れていた。

蓮太郎が来る。

猪子蓮太郎 思わず丑松は、先輩の耳の側へ口を寄せた。

瀬川丑松 先生。私です、瀬川です。

猪子蓮太郎　なんと呼んで見ても、月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。

島崎藤村　蒼《あお》ざめた先輩の頬へ自分の頬を押宛てて、

瀬川丑松　先生、先生。

奥様　そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せてやった。

そうして戸板に載せて、上から外套を懸けて、扇屋を指して出掛けた頃は、月も落ちかかって居た。丑松はさくさくと音のする雪を踏んで、先輩の一生を考えながらついで行つた。

奥様、去る。

島崎藤村　丑松は声を放って、

瀬川丑松　歩きながら慟哭《どうこく》した。

猪子蓮太郎　我は穢多を恥とせず。

島崎藤村　この時に成つて、始めて丑松も気がついたのである。

瀬川丑松　自分は隠蔽《かく》そう隠蔽そうとして、持つて生れた自然の性質を銷磨

《すりへら》して居たのだ。その為に一時《いつとき》も自分を忘れる

ことが出来なかつたのだ。思えば今迄の生涯は虚偽《いつわり》の生涯であつた。自分で自分を欺《あざむ》いて居た。ああ何を思い、何を煩う。

猪子蓮太郎　我は穢多なり

瀬川丑松　男らしく社会に告白するが好いではないか。

猪子蓮太郎　やがて扇屋の奥座敷には様々な人が集つて後の事を語り合つて居た。

島崎藤村　座敷の床の間に寄せ、北を枕にして、蓮太郎の死体の上には旅行用の茶色の

膝懸《ひざかけ》をかけ、顔は白いハンケチで掩《おお》うてあつた。

瀬川丑松　死んだ先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるような

心地がした。告白。それは今まで思いもよらなかつた考えだつた。

島崎藤村　急に丑松は新しい勇気を掴んだ。

瀬川丑松　明日、学校へ行つて打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。

猪子蓮太郎　そう決心して、生徒に言つて聞かせる言葉、進退伺いに書いて出す文句、

その他の色々なことも想像して、

島崎藤村　蓮太郎の遺骸《なきがら》の前で過したのであつた。

瀬川丑松　かれこれするうちに、鶏が鳴いた。

島崎藤村　丑松は新しい暁《あかつき》の近づいたことを知つた。

四幕二場

瀬川丑松が来る。

瀬川丑松 学校へ行く支度をする為に、朝早く蓮華寺へ帰った。庄馬鹿を始め、子坊主迄、談話《はなし》は猪子先生の最後、高柳の噂で持切って居た。昨日の朝 私の留守へ尋ねて来た客が亡くなったその人である、と聞いた時は、一同驚き呆れた。私はまた奥様から、妹が長野の方へ帰るように成ったこと、住職が手を突いて詫入《わびい》ったこと、夫婦別れの話も。見合せにしたということ聞いた。

お志保が来る。

お志保 いつも寺では早く朝飯《あさはん》を済《すま》すところからして、丑松の部屋へも袈裟治が膳を運んで来た。こうして寺の人と同じように早く食うということは、近頃無い。朝は必ず生温《なまあたか》い飯に、煮詰った汁ときまってる居たのが、その日にかぎっては、飯も焚きたての氣《いき》の立つやつで、汁は又、煮立つたばかりの赤味噌のにおいがうまそうに鼻の端《さき》へ来るのであった。

瀬川丑松 小皿には好物の納豆もついた。膳に向いながら、兎も角もこうして生きながら来た今日迄《こんにちまで》を不思議にありがたく考えた。穢多の子の身であると覚期《かくご》すれば、飯を食うにも我知らず涙がこぼれた。朝飯の後、私は机に向って進退伺を書いた。其時一生の戒を思い出した。阿爺《おとつ》さん、堪忍《かんにん》して下さい。

お志保 と詫入るように繰返した。冬の朝日が射して来た。丑松は机を離れて窓の方へ行った。障子を開けて眺めると、銀杏《いちじょう》の梢《こずえ》に、雪に包まれた町々の光景が見渡される。家と家との間からは青々とした朝食《あさげ》の煙が静かに立登った。

瀬川丑松 小学校の建築物《たてもの》も、今、日をうけた。名残惜《なごりを》しいような氣に成って、ややしばらく眺め入って居たが、

お志保 胸に浮んだは『懺悔録』、開卷第一章、『我は穢多なり』と書起してあったのを今更のように新しく感じて、この町の人々に告白するように、その文句を窓のところで繰返した。

瀬川丑松 我は穢多なり。

お志保 破戒。

住職が来る。

蓮華寺の住職 丑松は蓮華寺の山門を出た。とある町の角のところまで歩いて行くと、向こうから巡査に引かれて来る四五人の男に出逢《であ》った。いづれも腰繩を付けられ、蒼ざめた顔付して、人目を憚《はばか》りながら通る。

お志保 中に一人、黒の紋付羽織、白足袋 穿《ばき》、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、すぐに高柳利三郎と知れた。

瀬川丑松 よく見ると、一緒に引かれて行く怪しげな風体の人々は、高柳の為につかわれた壮士らしい。

蓮華寺の住職 ああ、捕って行くナ。自業自得さ。

瀬川丑松 見る見る高柳の一行は巡査の言うなりに町の角を折れて、やがて雪山の影に隠れてしまった。

敬之進が来る。

風間敬之進 学校の運動場には雪が積上げてあった。

蓮華寺の住職 玄関も、

瀬川丑松 廊下も、

風間敬之進 広い体操場も、

瀬川丑松 楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。

お志保 授業の始まるまで、丑松は最後の監督をする積りで、あちこちこちと廻って歩くと、

蓮華寺の住職 大鈴の音が響き渡ったのは間も無くであった。生徒は互いに上草履鳴して、我勝《われがち》に体操場へと塵埃《ほこり》の中を急ぐ。

風間敬之進 やがて男女の教師は受持受持の組を集めた。

瀬川丑松 高等四年の生徒は後について、足拍子そろえて、一緒に長い廊下を通った。

お志保 授業だけは無事に済した上で、と丑松は湧上《わきあが》るような胸の思を制《おさ》えながら、三時間目の習字を教えた。

蓮華寺の住職 午後の課目は地理と国語とであった。五時間目には、国語の教科書の外に、習字の清書、作文の帳面、そんなものを一緒に持って教室へ入ったので、それと見た好奇《ものずき》な少年はもう眼を円くする。

風間敬之進 丑松はそれを自分の机の上に乗せて、例のように教科書の方へ取掛ったが、やがていつもの半分ばかりも講釈したところで本を閉ぢて、

お志保 少し話すことが有る、

瀬川丑松 と言って生徒一同の顔を眺め渡すと、

お志保 先生、御話ですか。

蓮華寺の住職 と気の早いものはすぐにそれを聞くのであった。

お志保 御話、御話

風間敬之進 と請求する声は教室の隅から隅までも拡《ひろが》った。

お志保 丑松は習字やら、図画やら、作文の帳面やらを生徒の手に渡した。

瀬川丑松 中には、朱で点を付けたのもあり、優とか佳とかしたのもあった。または、全く目を通さないのもあった。

風間敬之進

丑松は先ず其詫《そのわび》から始めて、なおしてやりたいは遣りたいが、もうそれをする暇が無いという話を話し、こうして一緒に稽古をするのも今日限りであるといふことを話し、

蓮華寺の住職

自分は別離《わかれ》を告げる為にここに立って居るといふことを話した。

瀬川丑松

皆さんも御存じでしょう。この山国に住む人々を分けて見ると、おおよそ五通りに別れて居ます。それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶

《ぼうさん》と、それからまだ外に穢多という階級があります。御存じで

しょう、穢多は今でも町はづれに一団《ひとかたまり》に成って居て、皆さん

の履く麻裏《あさうら》を造ったり、靴や太鼓や三味線等を製《こしら》

えたり、あるものはお百姓して生活《くらし》を立てているということ。

御存じでしょう、穢多は御出入と言つて、稲を一束づつ持つて、皆さんの

父親《おとつ》さんや祖父《おぢい》さんのところへ一年に一度は必ず

御機嫌伺いに行きましたことを。御存じでしょう、穢多が皆さんの御家へ

行きますと、土間のところへ手を突いて、特別の茶椀で食物《くいもの》な

ぞを頂戴して、決して敷居から内部《なか》へは一步《ひとあし》も入られ

なかつたことを。皆さんの方から又、用事でもあつて穢多の部落へ御出

《おいで》になりますと、煙草《たばこ》は燐寸《マッチ》で喫《の》んで

頂いて、御茶は有《あり》ましても決して、差上げないのが昔からの習慣で

す。まあ、穢多というものは、卑賤《いや》しい階級としてあるのです。

もしその穢多がこの教室へやって来て、皆さんに国語や地理を教えるとし

ましたら、その時皆さんはどう思いますか、皆さんの父親《おとつ》さんや

母親《おつか》さんは奈何《どう》思ひますか。実は、私はその

卑賤《いや》しい穢多の一人です。皆さんも、もう十五六。万更《まんざら》

世情《ものごころ》を知らないという年齢《とし》でも有ません。どうぞ

私の言うこと、よく記憶《おぼ》えて置いて下さい。これから将来《さき》、

五年十年と経つて、たまに皆さんが小学校時代のことを考えて御覧なさる

時に。ああ、あの高等四年の教室で、瀬川という教員に習つたことが

有つたツけ。あの穢多の教員が素性を告白《うちあ》けて、別離《わかれ》

を述べて行く時に、正月になれば自分等と同じように屠蘇《とそ》を祝ひ、

天長節が来れば同じように君が代を歌って、かげながら自分等の幸福
《しあわせ》を、出世を祈ると言ったツけ。こう思い出して頂きたいのです。
私が今 こういうことを告白《うちあ》けましたら、定めし皆さんは
穢《けがらわ》しいという感想《かんじ》を起すでしょう。ああ、
仮令《たとえ》私は卑賤《いや》しい生れでも、すくなくも皆さんが
立派な思想《かんがえ》を御持ちなさるように、毎日それを心掛けて教えて
上げた積りです。せめてその骨折に免じて、今日迄《こんにちまで》のこと
はどうか許して下さい。皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、どうぞ父親
《おとつ》さんや母親《おつか》さんに私のことを話して下さい。今まで
隠蔽《かく》して居たのは全くすまなかつた、と言って、皆さんの
前に手を突いて、こうして告白《うちあ》けたことを話して下さい
全く、私は穢多です、調里です、不浄な人間です。許して下さい
板敷の上へ跪《ひざまづ》いた。後列の方の生徒は急に立上った。一人立ち、
二人立ちして、眺めるうちに、この教室に居る生徒は総立ちに成って、
あるものは腰掛の上に登る、あるものは席を離れる、あるものは廊下へ
出て声を揚げながら飛んで歩いた。その時大鈴の音が響き渡った。
教室の戸が開いた。他の組の生徒も教師も出て来た。
風間敬之進 銀之助は職員室で話しこんで居る最中、ふと丑松のことを耳に入れた。
思わず銀之助はそこを飛出した。

銀之助が来る。

土屋銀之助 玄関を横切って、左右に馳違《はせちが》う少年の群を分けて、
高等四年の教室へ近いで見ると、廊下のとこに校長、教師五六人、
中に文平も、その他高等科の生徒が丑松をとりまいて居たのである。
歩み寄って、助け起しながら、着物の塵埃《ほこり》を払ってやる、
土屋君、許してくれ給え
土屋銀之助 解った、解った、君の心地《こころもち》はよく解った。むむ、進退伺いも
用意して来たね。後の事は僕に任せるとして、君はすぐに帰り給え。
瀬川丑松 許してくれ給え、私は。私は穢多です。

四幕三場

銀之助が来る。

土屋銀之助 一寸伺いますが、瀬川君はこちらへ参りませんでしたろうか。

猪子の妻が来る。

猪子の妻 銀之助は敬之進の住居《すまい》を訪れた。友達思いの銀之助は心配しながら、丑松を追って尋ねて来たのであった。

お志保が来る。

お志保 瀬川さん？あれ、今御帰りに成ましたよ。

土屋銀之助 今？それからどっちの方へ行きましたろう、御存じは有ますまいかしら。

お志保 あの、猪子さんの奥様が東京から御見えに成るそうですね。多分その方へ。

ホラ市村さんの御宿の方へ尋ねていらしたんでしょう。

土屋銀之助 市村さんのところへ？ 実は僕も非常に心配しましてね、蓮華寺へ行つて聞いて見ました。まだ瀬川君は学校から帰らんという。それから市村さんの宿へ行つて見ると、あすこにも居ません。こりゃ、あなたのところかも知れない、こう思つてやつて来たんです。

お志保 行違いに、おなんなすつたんでしよう。まあ御上りなすつて下さいませんか、と言われて、お志保に導かれて、銀之助は炉辺《ろばた》へ上つた。お志保の頬には涙のあとが乾かずにあつた。どういふことを言つて丑松が別れて

行つたか、お志保の顔つきで胸に浮ぶ。どうかして友達を助けない、お志保にも話そうと思つたのであつた。銀之助はお志保の身の上から聞き初めた。

お志保は、すぐに、銀之助の頼もしい気象を看取つたのである。

丑松と無二の朋友であるということも好く承知して居る。

お志保 本当に自分の心地《こころもち》も解つて、身を入れて話を聞いてくれるのはこの人だ、さて、どうして父親のところへ歸つて居るか、それを尋ねられた時はもう胸一ぱいに成つてしまつた。蓮華寺を脱けて出ようと決心するまでの一伍一什《いちぶしじゅう》何から話していいものやら、解らない位。

猪子の妻 流石、娘心の感じ易さ、暗く煤《すす》けた土壁の内部《なか》の光景

《ありさま》をも恥ずかしく思つたという風で、着物の前を掻合せ聞かせる。

土屋銀之助 あの寺を出ようと思ひ立つたのは、泣いて、泣いて、泣尽した揚句のこと。

だから、何処へ歸るといふ目的《めあて》も無かつたのである。

猪子の妻

悲しい夢のように歩いて来る途中、雪の上に倒れて居る人に出逢った。見ればその醉漢《さけよい》は父であった。お志保は父がもう凍え死んだのかと思つた。丁度通りかかる音作を呼留めて、一緒に助け起して、やつとこの家で家まで連帰つて見ると、少し遅かろうものなら命をとられるところ。医者の話によると、身体の衰弱《おとろえ》は一通りで無い。助かる見込は有るまいとのこと。そればかりでは無い。不幸《ふしあわせ》はこの屋根の下にも待受けて居た。来て見ると、もう継母も、異母《はらちがい》の

土屋銀之助

弟妹《きょうだい》も居なかつた。もつとも、その前の晩、烈しい夫婦喧嘩があつて、継母はお志保のことや父の酒のことを言つて、泣叫んだという。

お志保

下高井にある生家《さと》を指して、三人だけ子供を連れて、父の留守に家出をしたものらしい。それは継母が自分で産んだ子供のうち、三番目のお末を残して、進に、お作に、それから留吉と、こう引連れて行つた。

割合に温順《おとな》しいお末を置いて、あの厄介者のお作を腰に付けたは、流石に後のことをも考へて行つたものと見える。

猪子の妻

こういう中にも、ひとり力に成るのは音作で、毎日夫婦して来て、物をくれるやら、旧《むかし》の主人をいたわるやら、お末をば世話すると

土屋銀之助

言つて、自分の家の方へ引取つて居るとのこと。して見ると。今御家にいらつしやるのは、父親《おとつ》さんに、貴方に、それから省吾さんと、こう三人なんですか。

お志保

はあ。

猪子の妻

お志保は涙ぐんで、垂下る鬢《びん》の毛を搔上げた。そして丑松の逢いに来た様子を話した。お志保の前に手を突いて、素性を告白《うちあ》けて行つたことを話した。

お志保

ほんとうに御気の毒な様子でしたよ。いろいろ伺つて見たいと思つて居りますうちに、瀬川さんはさつさと出て行つておしまいなさる。

後で私はさんざん泣きました。

土屋銀之助

そうですね。ああ、僕の想像した通りだった。定めしあなたも驚いたでしょう、瀬川君の素性を始めて御聞きになつた時は。

お志保

いいえ。

土屋銀之助

ホウ。

お志保

だって今日始めてでもございませんもの。勝野さんがどこかで聞いていらしつて、いつぞや私に話しましたんですもの。

土屋銀之助

あの男も饒舌家《おしゃべり》で、ほんとうに仕方が無い奴だ。何ですか、勝野君は何だつてまたそんなことを貴方に話したんでしょう。

お志保

妙なことを仰《おっしゃ》るんですよ。親類はこれこれだの、今に自分は出世して見せるのツて

土屋銀之助 今に出世して見せる？そんなことを。

お志保 それから、瀬川さんのことなぞ、それは酷い悪口を仰いましたよ。

私は、もう口惜しくて、口惜しくて。気の毒でなりません。

土屋銀之助 ほんとに？ ほんとに貴方はそう考えて下さるんですか。僕は、あの友達を助けて頂きたいと思っっているような訳ですが

お志保 助けろと？私に？

土屋銀之助 ええ。実は、この前の宿直の時に、瀬川君の意中を叩いて見たのです。

友達というものも有って見れば、及ばずながら力に成るといふことも有ろうぢやないか。こう言いました。すると、瀬川君は貴方のことを

言出して。僕には貴方を大切に思っているのはわかりました。きっと、

瀬川君は自分の素性を考えて、到底及ばない希望《のぞみ》と。それで今日、貴方のところに来て、今まで隠していた素性を自白したのです。

そこです。もし貴方にあの男の真情《こころもち》が解りましたら、一つ助けてやろうという考えを持って下さることは出来ずまいか。

お志保 まあ、何と申上げていいか解りませぬけれど

猪子の妻 とお志保は耳の根元までも紅《あか》くなつて、

お志保 私はもうその積りで居りますんですよ。

土屋銀之助 一生？

お志保 はあ。

猪子の妻 このお志保の答えに愛も、涙も、決心も、すべてこの一息のうちに含まれて居た。兎も角も、このことを話して友達のを救おう。

やがて銀之助は炉辺を離れようとした。

お志保 あの、御願いで御座ますが、もし「懺悔録」という御本が御座いましたら、貸して頂けませんか。

土屋銀之助 「懺悔録」？

お志保 猪子さんの御書きなすつたとかいふ

土屋銀之助 あれですか。よく貴方はあんな本を御存じですね。

お志保 瀬川さんが平素《しよっちゅう》読んでいらつしやいましたもの。

土屋銀之助 承知しました。瀬川君のところには有ましようから、行つて話して見ましよう。もし無ければ、どこか捜して見て、是非一冊贈らせることにしましよう。

猪子の妻 こう言つて、銀之助は弁護士の宿を指して急いだ。

四幕四場

銀之助が来る。

土屋銀之助 扇屋では人々が蓮太郎の遺骸《なきがら》の周囲《まわり》に集った

ところ。親切な亭主の計いで、焼場の方へ送る前に亡くなった人の

魂を弔いたいという。その日の午後東京から着いたという蓮太郎の妻を

始め、弁護士、丑松も居た。

藤村が来る。

島崎藤村 旅で死んだということにあわれに思つかして、扇屋の家の人も弔い

に来る。縁もゆかりも無い泊客ですら廊下を集って、寂しい木魚の音に耳を

澄すのであった。焼香も済み、長野新聞の記者なども混雑《とりこみ》の

中へ尋ねて来て、聞き取ったことを手帳に書留める。

猪子の妻が来る。

島崎藤村 貴方が奥様《おくさん》でいらっしやいますか。

猪子の妻 はい。

島崎藤村 奥様、誠に御気の毒なことで御座います。猪子先生の御名前はかねて

承知いたしておりました、陰ながら御慕い申して居たのですが

猪子の妻 はい。

土屋銀之助 こういう挨拶はすべて追憶《おもいで》の種であった。人々の話は蓮太郎の

ことで持切った。やがて未亡人は夫と一緒に信州に来たことを言い出して、

猪子の妻 別れる前の晩に不思議な夢を見たこと、妙に夫の身の上が気に懸ったこと、

其を言つて酷《ひど》く叱られたことなどを話した。彼是を思合せると、

彼時《あのとき》にもう夫は寛期《かくご》して居ることが有つたらしい

島崎藤村 こう言つて、思いがけない出来事の為に飛んだ迷惑を人々に懸けた、と

気の毒がる。流石に堪えがたい女の情もあらわれて、淡泊《さっぱり》した

未亡人の言葉は反つて深い同情を引いたのである。市村弁護士は銀之助を

部屋の片隅へ招いた。相談というは丑松の身に關したことであった。

土屋銀之助 弁護士の言うには、丑松も今となつてはこの飯山に居にくい事情も有ろう

し、未亡人はまた未亡人でこから帰るには男の手を借りたくも有ろうし、

するからして、あの蓮太郎の遺骨を護つて、一緒に東京へ行つて貰いたいが

どうだろう。

島崎藤村

選挙を眼前《めのまえ》にひかえさえしなければ、無論、自身で随いて行くべきでは有るが、それは未亡人が強いて辞退する。せめてこの際選挙の方に尽力して夫の魂を慰めてくれと。

土屋銀之助

聞いて見れば未亡人の志も、もつとも。一切の費用は自分の方で持つ。是非。とのことであつた。

島崎藤村

という訳で、瀬川さんにも御話したのですが、学校の方の都合は、君、どんなものでしょう。

土屋銀之助

学校の方ですか。実は、瀬川君を休職にすると行って、その下相談が有つたという位ですから、無論差支は有ますまいよ。校長の話では、郡視学もその積りで居るそうです。まあ、学校の方のことは僕が引受けて、どんなにでも都合の好いように致しましょう。一日も早く飯山を発ちました方が瀬川君の為には得策だろうと思ふんです。

猪子の妻

こういう相談をして居るところへ、棺《ひつぎ》が持運ばれた。人々は最後の別かれを告げる為にその棺の周りに集つた。焼場の方へ送られることに成つた頃は、もう薄暗かつたのである。

島崎藤村

火を入れるところまで見届けて、焼場から帰つた後、丑松は弁護士や銀之助と火鉢を取囲《とりま》いて、扇屋の奥座敷で話した。無情《つれな》い運命も、今は丑松の方へ向いて、少し笑つて見せるようになった。飯山病院から追われ、鷹匠《たかしょう》町の宿からも追われた大日向が、実は、追放の恥辱《はづかしめ》が非常な奮発心を起させた動機となつて、アメリカのテキサスで農業に従事しようという新しい計画は、意外にも市村弁護士の口を通して、丑松の耳に希望《のぞみ》を囁いた。

土屋銀之助

教育のある、確かな青年を一人世話してくれ、かねて弁護士が大日向から依頼されて居たことで、丁度丑松と素性も同じ、定めしこの話をしたら先方《さき》も悦《よろこ》ぼう。

猪子の妻

望みとあらばテキサスあたりへ出掛ける気は無いか。心懸け次第で随分勉強することも出来よう。この話には銀之助も熱心に賛成した。

土屋銀之助

見給え。捨てる神あれば、助ける神ありさ。

島崎藤村

明後日の朝、大日向が我輩の宿へ来る約束に成つて居る。逢つて見たまえ。

土屋銀之助

市村弁護士の言葉は、枯れ萎れた丑松の心を励《はげま》して、様子によつては頼んで見よう、働いて見ようという気を起させたのである。

猪子の妻

そればかりでは無い。銀之助から聞いたお志保の物語。あの可憐な決心と涙とはどんなに深い震動を丑松の胸に伝えたろう。敬之進の病氣、継母の家出、そんなこんなが一緒に成つて、お志保の心情を可傷《いたわ》しく思わせる。

土屋銀之助

絶望し、断念し、素性まで告白して別れた丑松の為に、ひそかに熱い涙をそそぐ人が有ろうとは。

島崎藤村 心の底からしぼりだした懺悔を聞いて、一生を卑賤《いや》しい穢多の子に
寄せる人が有ろうとは。

土屋銀之助 どうして、君、お志保さんは、はなかなかしつかりものだけ。

猪子の妻 と銀之助はつけたして言った。

島崎藤村 その翌日、銀之助は友達の為に、学校へも行き、蓮華寺へも行き、お志保の
ところへも行った。蓮華寺にある丑松の荷物を取纏めて、すぐに要《い》
るものは要るもの、寺へ預けるものは預けるもので見別《みわけ》をつけた
のも、すべて銀之助の骨折であった。銀之助はまた、お志保のことを未亡人
にも話し、弁護士にも話した。

土屋銀之助 女は女に同情《おもいやり》の深いもの。ことにお志保の不幸な境遇は
未亡人の心を動かしたのであった。先々は東京へ引取って一緒に暮りたい。
丑松の身が決まった暁には自分の妹にして結婚させるようにしたい。
こう言出した。兎に角、後の事は弁護士も力を添える。

島崎藤村 という訳で、万事は市村弁護士と銀之助とに頼んで置いて、丑松は慌ただ
しく飯山を発つことに決めた。

四幕五場

奥様が来る。

奥様 出発の日が来た。夜明け頃から雲《みぞれ》が降出して、扇屋に集る人々の

胸には旅の思いを添える。一台の櫓《そり》は朝早く扇屋の前で停った。

下りた客は厚羅紗《あつらしゃ》の外套で深く身を包んだ紳士風の人、

櫓曳《そりひき》に案内させて、弁護士に面会を求める。

藤村が来る。

島崎藤村 おお、大日向が来た。

奥様 と市村弁護士は出迎えた。大日向は約束を違《たが》えずやって来たので、

薄暗いうちに下高井を発ったという。上れと言われても上りもせず、

ただ上《あが》り櫃《がまち》のところへ腰掛けたままで、弁護士か

ら法律上の智慧を借りた。用談を済し、蓮太郎への弔意《くやみ》を述べ、

やがてそこそこにして行こうとする。弁護士は丑松のことを語り聞かせて、

島崎藤村 まあ、上るさ。猪子君の細君も居るし、それに今話した瀬川君も一緒だから

ぜひ逢ってくれたまえ。そんなところに腰掛けて居たんぢゃ、ゆっくり話も

出来ないぢゃ無いか。

奥様 大日向は苦笑いするばかり。どんなに薦められても、決して上ろうとしない。

いずれ近い内に東京へ出向くから、猪子の家を尋ねよう。その折に丑松にも

逢おう。そういう気心の知れた人なら双方の好都合。くわしいことは出京の

上で。とあくまでも言い張る。

島崎藤村 そんなに今日は御急ぎかね。

奥様 いえ、ナニ、急ぎという訳でも有ませんが

島崎藤村 では、こうしてくれ給え。上の渡しを渡ると休み茶屋が有る。そこで一同

待ち合せて、今朝 発つ人を送る約束。多分丑松の親友も行って居るはず。

一步先へ出掛けて待って居てくれないか。兎に角、丑松を紹介したいから

奥様 むむ、そんなら御待ち申しませう。

島崎藤村 大日向も思い出したと見えるなあ。

奥様 と弁護士は独語《ひとりごと》のように言って、旅の仕度に忙しい未亡人や

丑松に話して笑った。

丑松が来る。

瀬川丑松 雲《みぞれ》はしとしと降りそそいで居た。

島崎藤村 丑松は人々と一緒に、先輩の遺骨の後について、雪の上を滑る櫓の響を聞きながら、静かに自分の一生を考えながら歩いた。

瀬川丑松 猜疑《うたがい》、恐怖《おそれ》ああ、ああ、二六時中忘れることになかった苦しみは僅かに胸を離れた。今は鳥のように自由だ。

奥様 丑松は十二月の朝の空気を呼吸して、ようやく重荷を下した思いに帰った。

瀬川丑松 踏む度にさくさくと音のする雪の上は、確かに自分の世界の様に思われた。

島崎藤村 上の渡しの方へ曲ろうとする町の角で、一同はお志保に出逢った。

お志保が来る。

瀬川丑松 お志保さん。

奥様 丑松の紹介で、お志保は始めて未亡人と弁護士とを知った。女同志は直に一緒に成って、言葉を交しながら歩き初めた。

瀬川丑松 上の渡しの長い船橋を越えて対岸の休み茶屋に着いたは間も無くであった。そこには銀之助が早くから待受けて居た。

島崎藤村 例の下高井の大尽も出て迎える。弁護士が丑松に紹介したこの大日向という人は、見たところ余り価値《ねうち》の無さそうな。

田舎の漢方医者とも言ったような、平凡な容貌《かおつき》で、これがアメリカのテキサスあたりへ渡って新事業を起そうとする人物とは、いかにしても受取れなかったのである。

お志保 言葉を交して居るうちに、次第に丑松はこの人の堅実《たしか》な、引締った、底の知れないところもある性質を感じ得《かんづ》くように成った。

奥様 大日向はテキサスにあるという日本村のことを丑松に語り聞かせた。

瀬川丑松 北佐久の地方から出て遠くその日本村へ渡った人々のことを語り聞かせた。

奥様 へえ、そうでしたか。

お志保 と大日向は鷹匠町の宿のことを言出して笑った。

奥様 貴方もあすこの家に泊っておいででしたか。いや、あの時は酷い熱湯《にえゆ》を浴せかけられましたよ。実は、私も、そういう目に

逢わせられたものですから、それで今度の事業を思立ったような訳なんです。今でこそこうして笑って御話するようなものの、あの時は全く、残念に思いましたからなあ。

銀之助が来る。

土屋銀之助 かみさん。それでは、さっきのものを、ここへ出して下さい。

島崎藤村 と銀之助は指図する。別れの酒をこの休み茶屋で酌交《くみかわ》すのは、送る人も、送られる人も、共に長く忘れまいと思ったことであつたらう。

瀬川丑松 土屋君、いろいろ君には御世話になつた。

土屋銀之助 それは御互いサ。しかし、こうして君を送ろうとは、僕も思いがけなかつたよ。はゝゝゝ。人の一生といふ奴は實際解らないものさね。

瀬川丑松 いずれまた東京で逢おう。

土屋銀之助 ああ。さあ、なんにもないが一盃飲んでくれ給え。お志保さん、すみませんが、一つ御酌《おしゃく》して下さいませんか。

奥様 お志保は酒瓶《ちようし》を持添えて勧めた。喜びと悲しみが一緒になつて小な胸の中を往来する、

土屋銀之助 あなたも一つ御上りなすつて下さい。さあ、僕が御酌しましょう。

お志保 いえ、私は頂けません。

奥様 そりゃ、いけない。こういう時には召上るものです。真似でも

なんでもよう御座んすから、一つ御受けなすつて下さい。

島崎藤村 ほんのしるしでサ。

お志保 どうぞ、それでは、少許《ぼっちり》頂かせて下さい。

瀬川丑松 お志保さんは飲む真似をして、紅《あか》くなつた。

猪子の妻が来る。

猪子の妻 次第に高等四年の生徒が集まつて来た。その日の出発を聞伝えて、せめて見送りしたいという心根から、丑松を慕つてやつて来たのである。

瀬川丑松 丑松は少年と少年との間をあちこちと歩いて、別れの言葉を取り交わした、蓮華寺で撞く鐘の音が起つた。鐘の音は冬の日の寂寞《せきばく》を破つて、千曲川の水に響き渡つた。

土屋銀之助 それは丑松の為に長い別れを告げるようにも、白々と明初《あけそ》めた一生のあげほのを報せるようにも聞える。

島崎藤村 やがて櫓《そり》の用意も出来たという。

お志保 丑松は根津村に居る叔父夫婦のことを銀之助に話して、さぞあの二人も心配して居るであらう、もし自分の噂が姫子沢へ伝つたら、叔父夫婦はどんな迷惑を蒙《こうむ》るかも知れない、

猪子の妻 ひよつとしたら、あの村には居られなくなる、どうしたものだろう。

土屋銀之助 その時はまたその時さ。万事、大日向さんに頼んで見給え。もし叔父さんが

根津に居られないようだったら、下高井の方へでも引越して行くな。もうこうなつた以上、心配したつて仕方がない。なあと、君、

どうか方法は着くよ。

瀬川丑松 では、そう話をして置いてくれ給えな。

土屋銀之助 よろしい。

島崎藤村 こう引受けて貰い、それから例の『懺悔録』はいずれ東京へ着いた上、新本を求めて、お志保のところへ送り届けることにしよう、と約束して、やがて丑松は未亡人と一緒に見送りの人々へ別れを告げた。

瀬川丑松 御機嫌よう。

島崎藤村 それが最後にお志保を見た時の丑松の言葉であった。

お志保 思わず熱い涙が頬を伝って流れ落ちた。

猪子の妻 丑松は二度も三度も振向いて見て、ホツと深い溜息を吐《つ》いた。

島崎藤村 櫛《そり》は雪の上を滑り始めた。

瀬川丑松 これは過去の物語である。

過去には後の時代にとって、

反省すべき事柄も多い。

過去こそ、真実であるからであろう。

丑松、去る。

おわり

(戯曲化するにあたりweb青空文庫のデータを使用した)